



**E-ASIA**  
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

# 唄立山心中一曲

## 泉鏡花

底本：「泉鏡花集成 6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 3 月 21 日第 1 刷発行

# 唄立山心中一曲

泉鏡花

—

「ちらちらちら雪の降る中へ、松<sup>たいまつ</sup>明<sup>あき</sup>がぱっと燃えながら二本——誰も言うこと  
でございますが、他<sup>ほか</sup>にいたし方もありませんや。真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>な手が二つ、悚然とするほ  
どな<sup>おんな</sup>婦<sup>め</sup>が二人……もうやがてそこら一面に<sup>うっす</sup>薄<sup>うす</sup>り白くなつた上を、<sup>しずか</sup>静<sup>しずか</sup>に通つ  
て行くのでございます。正体は知れていても、何しろそれに、所が山奥でございましょ  
う。どうもね、余り美しくって<sup>ものすご</sup>物<sup>もの</sup>凄<sup>すご</sup>うございました。」

いかげや  
と鑄掛屋が私たちに話した。

いきなり鑄掛屋が話したでは、ちと<sup>だしぬけ</sup>唐<sup>たう</sup>突<sup>つ</sup>に過ぎる。知<sup>ちかづき</sup>己<sup>ぢ</sup>になってこの話を聞  
いた場所と、そのいきさつをちょっと<sup>もうしの</sup>申<sup>まう</sup>陳<sup>ちん</sup>べる。けれども、肝心な雪女郎と山姫が  
ながじゅばん<sup>あらわ</sup>長<sup>なが</sup>襦<sup>じゅ</sup>袷<sup>ばん</sup>で<sup>あらわ</sup>顕<sup>あらわ</sup>れたようなお話で、少くとも御覧の方はさきをお急ぎ下さるであ  
らうと思う、で、簡単にその次第を申上げる。

おばすて<sup>おばすて</sup>うどんや<sup>うどんや</sup>  
所は信州<sup>おばすて</sup>姨<sup>おばすて</sup>捨<sup>おばすて</sup>の薄暗い<sup>うどんや</sup>饅<sup>うどんや</sup>饨<sup>うどんや</sup>屋<sup>うどんや</sup>の二階であつた。——饅<sup>うどんや</sup>饨<sup>うどんや</sup>屋<sup>うどんや</sup>さえ、のつけに薄

暗いと申出るほどであるから、夜の山の暗い事思ふべしで。……その癖、<sup>おかし</sup>可<sup>おかし</sup>笑<sup>おかし</sup>いの

は、私たちは月を見ると言ってお掛けたのである。

別に迷惑を掛けるような筋ではないから、本名で言っても差支えはなからう。その時

つれ こむらせたい の連は小村雪岱さんで、双方あちらこちらの都合上、日取が思う 壺 にはな

らないうるうどし、十一月の月上旬、潤年 の順におくれた十三夜の、それも四日ばかり過ぎた日の事であった。

——居待月である。

一杯飲んでいる内には、とくさ 木賊刈るという歌のまま、みが い よ 研 かれ出づる秋の夜の月とな

るであろうと、その気で しの 篠ノ井で汽車を乗替えた。が、日の短い頃であるから、五時

そこそこというのにもうとつぷりと日が暮れて、間は いなりやま ひとちょうば 稲荷山ただ一丁場だけ

ども、線路が上りで、進行が緩い処へ、乗客が急に少く、二人三人と数えるばかり、

おおき 大 な木の葉がぱらりと落ちたようであるから、かきあ がいとう そで 掻 合わす 外 套 の 袖 も、妙に

ばさばさと音がする。外は霜であろう。山の深さも身に沁みる。し よ 夜さえそぞろに更け行くように思われた。

「来ましたよ。」

「二人きりですね。」

と私は言った。

名にし負う月の名所である。この ステーション 停車場を、月の劇場の木戸口ぐらいな心得

のぼり まんどう 違いをしていた私たちは、幟 や 万 燈 には及ばずとも、屋号をかいた

ゆみはりちょうちん みょうがや 弓 張 提 灯 で、へい、茗荷屋でございます、旅店の案内者ぐらいは出てい

ようと思ったの大きな見当 ちがい か かけはし がけ 違 。絵に描いた木曾の 棧 橋 を想わせる、断崖の丸

木橋のようなプラットフォームへ、しかも下りたのはただ二人で、改札口へ渡るべき橋もない。

一人がバスケットと、一人が一升<sup>びん</sup> 壺を下げて、月はなけれど敷板の霜に寒い影を映しながら、あちらへ行き、こちらへ戻り、で、小村さんが唇をちょっと曲げて、「汽車が出ないと向うへは渡られませんよ。」

「成程。線路を突<sup>つき</sup>切<sup>き</sup>って行く仕掛けなんです。」

やがてむらむらと立昇る白い煙が、妙に透通<sup>さつ</sup>って、颯<sup>かか</sup>と屋根へ掛<sup>か</sup>る中を、汽車は音もしないように<sup>しずか</sup> 静<sup>じ</sup>に動き出す、と<sup>うるし</sup> 漆<sup>し</sup>のごとき<sup>まっくら</sup> 真<sup>ま</sup>暗<sup>くら</sup>な谷底へ、轟<sup>ごう</sup>と<sup>こだま</sup> 訝<sup>な</sup>する……

「行っていっしやいまし……お<sup>しずか</sup> 静<sup>じ</sup>に——」

と私はつい、目の<sup>さき</sup> 前<sup>まへ</sup>をすれすれに行く、冷たそうに曇った汽車の窓の<sup>あかり</sup> 灯<sup>あかり</sup>に<sup>あいさつ</sup> 挨拶<sup>あいさつ</sup>した。ここへ二人きり置いて行かれるのが、山へ<sup>す</sup> 棄<sup>す</sup>てられるような気がして心細かったからである。

壇はあるが、深いから、首ばかり並んで霧の<sup>なか</sup> 裡<sup>なか</sup>なる線路を渡った。

「ちょっと、伺いますが。」

「はあ？」

手ランプを提げた、真<sup>まっくら</sup> 黒<sup>くろ</sup>な<sup>いでたち</sup> 扮<sup>わ</sup>装<sup>か</sup>の、年の<sup>わか</sup> 少<sup>がかり</sup>い改札<sup>いちにん</sup> 掛<sup>がかり</sup> わずかに<sup>いちにん</sup> 一<sup>いちにん</sup> 人<sup>いちにん</sup>。

待合所の腰掛の隅には、頭から毛<sup>けつと</sup> 布<sup>かぶ</sup>を<sup>かぶ</sup> 被<sup>かぶ</sup>ったのが、それもただ一人居る。……

これが伊勢だと、あすこを<sup>ねら</sup> 狙<sup>ねら</sup>って吹矢を一本——と何も不平を言うのではない、旅

の秋を覚えたので。——小村さんは一旦外へ出たが、出ると、すぐ、横の崖<sup>いわ</sup> 崖<sup>いわ</sup>を

滴る、ひたひたと清水の音に、用心のため引返して、駅員に訊いたのであった。

「その辺に<sup>はたごや</sup>旅籠屋はありますか。」

「はあ、別に旅籠屋と言って、何ですな、これから下へ十四五町、……<sup>はんみち</sup>約半道ば

<sup>ゆ</sup>かり行きますと、湯の立つ家があるですよ。<sup>ほか</sup>外は大概一週間に一度ぐらいなもので  
すでなあ。」

「あの風呂を沸かしますのが。」

「さよう。」

<sup>ありがと</sup>「難<sup>う</sup>——少しどうも驚きました。とにかく、そこいらまで歩いてみましょう。」

と小村さんが暗がりの中を探りながら先へ立って、

「いきなり、風呂を沸かす宿屋が半道と来たんでは、一口飲ませる処とも聞きにくうご

ざいますよ。しかし何かしらありましょう……<sup>なん</sup>何しろ暗い。」

と構内の柵について……<sup>ともしび</sup>灯<sup>ゆり</sup>の百合が咲く、<sup>おおき</sup>大<sup>な</sup>峰、広い谷に、はらはらと

<sup>ひ</sup>ある灯をたよりに、<sup>けん</sup>もの<sup>の</sup>十<sup>間</sup>とは進まないで、口を開けて足を噛む<sup>か</sup>狼<sup>のおおかみ</sup>のよ

<sup>いわ</sup>うな<sup>こみち</sup>巖<sup>の</sup>径<sup>に</sup>行悩んだ。

「どうです、いっそここへ<sup>しゃが</sup>蹲<sup>びんづめ</sup>んで、<sup>う</sup>壇<sup>詰</sup>の口を開けようじゃありませんか。」

「まさか。」

と小村さんは苦笑して、

「<sup>たごと</sup>姨捨山、<sup>みち</sup>田<sup>毎</sup>の月ともあろうものが、こんな<sup>みち</sup>路<sup>で</sup>澄ましているって法はありません。

きっと方角を取違えたんでしょ。お待ちなさいまし、逆に<sup>ステーション</sup>停車場<sup>の</sup>裏の方へ戻っ

てみましょう。いくら<sup>あかり</sup>灯<sup>が</sup>見えるようです。」

双方黒い外套が、こんがらかって引返すと、<sup>ステーション</sup>停車場には早や駅員の影も見えぬ。毛布かぶりの瘦せた<sup>や</sup>達磨<sup>だるま</sup>の目ばかりが<sup>きらきら</sup>晃々と光って、今度はどうやら羅漢に見える。

<sup>ステーション</sup>停車場の<sup>うしろ</sup>後は、<sup>いきなり</sup>突然荒寺の裏へ入った形で、<sup>ぶん</sup>芬と身に沁みる木の<sup>し</sup>葉の<sup>こ</sup>匂、<sup>な</sup>鳥の羽で撫でられるように、さらさらと——袖が鳴った。

落葉を透かして、<sup>やまふところ</sup>山懐の小高い処に、まだ戸を鎖さない<sup>さ</sup>灯<sup>あかり</sup>が見えた。

小村さんが、まばらな竹の木戸を、手を拵げつつ探り当てて、

「きつと飲ませますよ、この戸の<sup>ぐあい</sup>工合が気に入りました」

<sup>いきおい</sup>と勢よく、一足先に上ったが、程もあらせず、ざわざわざと、落葉を鳴らして落来るばかりに引返して、

「退却……」

<sup>あだち</sup>「え、安達ヶ原ですか。」

と聞く方が慌てている。

「いいえ爺さんですがね、一人土間で<sup>わらじ</sup>草鞋を造ってましてね。何だ、誰じゃいって

<sup>わめ</sup>喚くんです。」

「いや、それは恐縮々々。」

「まことに済みません。発起人がこの様子で。」

「飛んでもない。こういう時は花道を歌で<sup>ひっこ</sup>引込むんです、柄にはありませんがね。何でしたっけ、……」

わが心なくさめかねつ <sup>さらしな</sup>更科や

姨捨山に照る月をみて

照る月をみて慰めかねつですもの、暗いから慰められて可いわけですか。いよいよ路  
が分らなければ、<sup>ステーション</sup>停車場で、次の汽車を待って、松本まで参りましょう。時間があ  
りますからそこは気丈夫です。」

しかるところ、暗がりに目が馴れたのか、空は星の上に星が <sup>かさな</sup>重って、<sup>そこひ</sup>底なく  
晴れている——どこの峰にも銀の <sup>ふくりん</sup>覆輪はかからぬが、<sup>おのず</sup>自から月の出の光が  
<sup>はだとお</sup>山の膚を透すかして、<sup>いわかけ</sup>巖の欠めも、<sup>かばいろ</sup>路の石も、<sup>あおみさ</sup>褐色に薄く蒼味を潮して、  
はじめ志した方へ <sup>かすか</sup>幽ながら見えて来た。灯 <sup>あかりさき</sup>前の木の葉は白く、陰なる朱葉  
<sup>にじ</sup>の色も浸む。

かくして <sup>たど</sup>辿りついた薄暗い饅饨屋であった。

<sup>なん</sup>何しろ薄暗い。……赤黒くどんより <sup>すす</sup>煤けた腰障子の、それも宵ながら <sup>もうろう</sup>朦朧と  
閉っていて、よろず荒もの、うどんあり、と記した <sup>おおき</sup>大な字が、<sup>いびき</sup>躰をかいていそう  
に見えた。

この店の女房が、東京ものは <sup>きれい</sup>清潔ずきだからと、気を利かして、正札のついた真  
<sup>ゆわかし</sup>新しい湯沸を達引してくれた心意気に対しても、言われた義理ではないのだけ  
れど。

「これは少々 <sup>ひどす</sup>酷過ぎますね。」

「ここまで来れば、あと一辛抱で、もうちとどうにかしたのがありましょう。」

実は、この段、<sup>ささや</sup>囁き合って、ちょうどそこが<sup>みつまた</sup>三岐の、一方は裏山へ上る  
やまそば<sup>こみち</sup>山岨の落葉の径。一方は崖を下る石ころ坂の急なやつ。で、その下りの方へ  
半町ばかりまた足探り試みたのであるが、がけの陰になって、暗さは暗し、路は悪し、  
ひ灯は遠し、思切って逆戻りにその<sup>おとず</sup>饅頭屋を音訪れたのであった。

「御免なさい。」

と小村さんが優しい<sup>おだやか</sup>穏な声を掛けて、がたがたがたと入ったが、向うの<sup>あいて</sup>対  
より土間の<sup>あしもと</sup>足許を<sup>うつむ</sup>俯向いて<sup>み</sup>視つつ、横にとぼとぼと歩いた。

灯が一つ、ぼうと赤く、宙に浮いたきりで何も分らぬ。<sup>つり</sup>釣ランプだが、<sup>ほや</sup>火屋も笠も、  
<sup>すす</sup>煤と一所に油煙で黒くなって正体が分らないのであった。

<sup>みつ</sup>が凝視める瞳で、やっと少しずつ、<sup>あたり</sup>四辺の<sup>あいろ</sup>黒白が分った時、私はフト思いがけな  
い珍らしいものを<sup>み</sup>視た。

## 二

<sup>かまち</sup>框の柱、<sup>てんびんぼう</sup>天秤棒を立掛けて、<sup>なべかま</sup>鍋釜の<sup>いかけ</sup>鑄掛の荷が置いてある——亭  
主が担ぐか、場合に依ってはこうした<sup>てあい</sup>徒の<sup>こやど</sup>小宿でもするか、鑄掛屋の居るに不  
思議はない。が、珍らしいと思ったのは、薄汚れた<sup>うこんもめん</sup>鬱金木綿の袋に包んで、その荷  
に<sup>ちょう</sup>一挺、<sup>まが</sup>紛うべくもない、<sup>ゆわ</sup>三味線を結え添えた事である。

話に聞いた——谷を深く、<sup>ふもと</sup>麓を狭く、山の奥へ入った村里を廻る遍路のような

かれら じょうり ゆ おき  
渠等には、小唄浄瑠璃に心得のあるのが少ない。行く先々の庄屋のもの置、

すまい  
村はずれの辻堂などを仮の住居として、昼は村の注文を集めて仕事をする、傍ら夜

はやりうた なにわぶし  
は村里の人々に時々の流行唄、浪花節なども唄って聞かせる。聞く方では、

祝儀のかわりに、なくても我慢の出来る、片手とれた鍋の鑄掛も あつら 誂 えるといった

こども あめがし ひとつ  
寸法。小児に飴菓子売って一手踊ったり、唄ったり、と同じ格で、ものは違って

も家業の愛想—— さかりば たばこぼん  
盛場の吉原にさえ、茶屋小屋のおかっぱお衰盆に飴を

じじ ばば たこ  
売って、爺やあっち、婆やこっち、おんじやらこっちりこ、ぱあばあと、鳴物入で鮎

とおかめの小人形を踊らせた、おん じい すご  
爺があつたとか。同じ格だが、中には凄しよう

うま  
な巧いがあるという。

たね ま  
唄いながら、草や木の種子を諸国に撒く。……怪しい鳥のようなものだと、その三味

じっ み  
線が、ひとりで鳴くように熟と視た。

「相談は整いました。」

ありがた  
「それは難有い。」

なん  
「きあ、二階へどうぞ……何しろ汚いんでございますよ。」

うわっぱり おんな  
と、雨もりのような形が動くと、紺の上被を着た婦になって、ガチリと釣ラン

ひね かまち はしごだん  
プを捻って離して、框から直ぐの階子段。

小村さんが小さな声で、

なん てい  
「何しろこの体なんですから。」

「結構ですとも、行暮れました旅の修行者になりましょうね。」

「では、そのおつもりで——さあ、<sup>あが</sup>上りましょう。」

<sup>いきおい</sup>と勢よく、下駄を踏違えるトタンに、

「あっ、」と言った。

きゃんきゃんきゃん、クイ、キュウと息を引いて、きゃんきゃんきゃん、クイ、クウン、きゅうと鳴く。

<sup>こいぬ</sup>見事に小<sup>ふみ</sup>狗を踏つけた。小村さんは<sup>うろた</sup>狼狽えながら、穴を<sup>のぞ</sup>覗くように土間を透かして、

「御免よ……御免よ……仕方がない、御免なさいよ。」

に<sup>はしご</sup>で、遁げないばかりに階<sup>あが</sup>子を上ると、続いた私も、一所にぐらぐらと揺れるのに、  
両手を壇の<sup>はじ</sup>端に<sup>すが</sup>しっかり縫った。二階から女房が、

「お気をつけなさいませよ……お<sup>つむ</sup>頭をどうぞ……お危うございますよ、お頭を。」

<sup>なあ</sup>「何に。」

<sup>ほっ</sup>吻としながら、小村さんは<sup>きお</sup>気競ったように、

「踏<sup>ぶ</sup>着けられた狗から見りゃ、頭を打つけるなんぞ何でもない。」

日頃、沈着な、謹み深いのがこれだから、余程<sup>あわ</sup>周章てたに違いない。

きゃんきゃんきゃん、クイツ、キュウ、きゃんきゃんきゃん、と<sup>きれぎれ</sup>断々に、声が細って  
<sup>なきや</sup>泣止まない。

「身<sup>し</sup>に沁みますね、何ですか、狐が鳴いてるように聞えます。」

木地の古<sup>こくたん</sup>びたのが黒檀に見える、卓<sup>ちゃぶだい</sup>子台にさしむかって、小村さんは襟を合

せた。

くだん まっくろ かしこま  
件 の油煙で真黒で、ぽっと灯の赤いランプの下に 畏 って、動くたびに、  
ぶるぶると畳の震う処は天変に対し、謹んで、日蝕を拝むがごとく、少なからず肝を冷  
しながら、

い  
「旅はこれだから可いんです。何も話の種です。……話の種と言えね、小村さん。」

と、探らないと顔が分らぬ。

「はあ。」

「何ですか、この辺には、あわれな、寂しい、物語がありそうな処ですね。あの、

つきのよいひなものがたり  
月 宵 鄙 物 語 というのがあります、御存じでしょうけれど。」

「いいえ。」

あさぎぬ  
「それはね、月見の人に、木曾の麻衣まくり手したる坊さん、というのが、話をする

さらしなやま まかり  
趣向になっているんですがね。(更科山の月見んとて、かしこに罷登りけるに、

おおい いわ ひじお たてまつ  
大なる巖にかたかけて、肘折れ造りたる堂あり。観音を据え奉れり。鏡

とやま  
台とか云う外山に向いて、)……と云うんですから、今の月見堂の事でしょう。……

きっとこの崖の半腹にありましようよ。……そこの高欄におしかかりながら、月を待つ

ま とぎ そのはらやま とくさがり  
間のお伽にとて、その坊さんが話すのですが、藪原山の木賊刈、

ふせやのさと ははきぎ ふるかつら ちくまがわ さざれいし  
伏屋里の箒木、更科山の老桂、千曲川の細石、姨捨山の

うばのいし みだし  
姥石なぞって、標題ばかりでも、妙にあわれに、もの寂しくなるのです。皆この

なん  
辺の、山々谷々の事なんでしょう。何にしろ、

信濃なる千曲の川のさゞれ石も

君しふみなば玉とひろはん

と言う場所なんですもの。——やあ、明るくなった。」

と思わず言った。

釣ランプが、真新しい、<sup>あかる</sup>明いのに取換ったのである。

「お待遠様、……済みません。」

「どういたしまして、飛んだ御無理をお願い申して。」

女房は崩れた<sup>びん</sup>鬢の黒い中から、思いのほか白い顔で<sup>にっこり</sup>莞爾して、

「私どもでは<sup>ありがた</sup>難有いんでございますけれども、まあ、何しろ、お月様がいらっして下さると可いんですけれども。」

その時、一列に<sup>かまぼこがた</sup>蒲鉾<sup>そ</sup>形に反った障子を左右に開けると、ランプの——小村さ

んが用心に<sup>つる</sup>蔓を<sup>おさ</sup>圧えた——灯が<sup>ひとあおり</sup>一煽、山気が<sup>さっ</sup>颯と座に沁みた。

「一昨晚の今頃は、二かさも三かさも<sup>おおき</sup>大い、<sup>まんまる</sup>真円いお月様が、あの正面へおいで  
出なさいましてございますよ。あれがね旦那、<sup>きょうだいざん</sup>鏡台山でございませがね、どうも暗うございまして。」

「音に聞いた。どれ、」

と立つと、ぐらぐらとなる……

「おっと。」

欄干につかまって、<sup>かたつむり</sup>蝸牛という身で、背を縮めながら首を伸ばし、

「漆で塗ったようだ、ぼっと霧のかかった処は<sup>ときだ</sup>研出したね。」

宵の明星が<sup>きらり</sup>晃然と<sup>あお</sup>蒼い。

「あの山<sup>やますそ</sup>裾<sup>が</sup>、左の方へ入江のように拡がって、ほんのり奥に<sup>あかり</sup>灯<sup>が見える</sup>で  
ございましょう。善光寺平<sup>ぜんこうじだいら</sup>でございましてね。灯のありますのは、善光寺の町な  
んでございますよ。」

「何里あります。」

「八里ございます。」

「ははあ。」

「真下の谷底に、ちらちらと<sup>ひ</sup>灯<sup>が見え</sup>ましょう、あそこが、八幡<sup>やはた</sup>の町でございましてね、  
お月見の方は、あそこから、皆さんが支度をなすって、私どもの裏の山へお上りにな  
りますんでございますがね。鏡台山と、ちょうどさし向いになっております——おお、  
冷えますこと、……<sup>ただいま</sup>唯<sup>今</sup>お火鉢を。」

「小村さん、寸法は分りました、どうなすったんです、景色も見ないで。」

と座に戻ると、小村さんは真顔で<sup>ひざ</sup>膝<sup>に</sup>手を置いて、

「いえ、その縁側に三人揃って立ったんでは、<sup>さじき</sup>棧敷<sup>けんのん</sup>が落ちそうで危<sup>険</sup>ですから。」

「まったく、これで猿楽があると、……天狗が揺り倒しそうな処です。<sup>おそろ</sup>可<sup>恐</sup>しいね。」

と二人は顔を見合せた。

が、注文通り、火鉢に<sup>ゆわかし</sup>湯<sup>沸</sup>が天上して来た、火も<sup>かッ</sup>赫<sup>と</sup>——この火鉢と湯沸が、

前に言った正札つきなる真新しいのである。酒も<sup>ちょうし</sup>銚<sup>子</sup>だけを借りて、持参の一升

<sup>びん</sup>壺<sup>かん</sup>の爛<sup>きざ</sup>をするのに、女房は氣障だという顔もせず、<sup>みょうり</sup>お客<sup>冥</sup>利<sup>に</sup>、義理にうどん

<sup>あつら</sup>を<sup>誂</sup>えれば、乱れてもすなおに<sup>いちょうがえし</sup>銀<sup>杏</sup>返<sup>びん</sup>の鬢<sup>を</sup>振って、

「およしなさいまし、むだな事でございます。おしたじが悪くって、めしあがられやしま

せんから。……何ぞお<sup>こう</sup>香のものを差上げましょう。」

その心意気。

ありがた  
「難<sup>あ</sup>有<sup>い</sup>い。」

あつかん  
と熱<sup>あ</sup>爛<sup>は</sup>三杯、手酌でたてつけた顔を撫でて、

「おかみさん。」

杯をずいとさして、

「一つ申上げましょう、お<sup>ちかづき</sup>知<sup>己</sup>に……」

「私是一向に不調法ものでございまして。」

ひとつ  
「まあ一<sup>あ</sup>盞。」

「もう、全く。」

ひとつ  
「でも、一<sup>あ</sup>盞ぐらい、お酌をしましょう。」

と小村さんが銚子を持ったのに、左右に手を振って、<sup>すべ</sup>こ<sup>きし</sup>るように、しかも<sup>きし</sup>軋<sup>ん</sup>で  
に  
遁<sup>に</sup>げ下りる。

「何だい。」

「毒だとも思いましたかね。してみると、お互の人相が思われます。おかみさん一人  
きりなんでしょうかしら。」

「泊りましょうか。」

ごじょうだん  
「御<sup>あ</sup>串<sup>あ</sup>戯<sup>あ</sup>を。」

クイツ、キュウ、クック——と……うら<sup>かなし</sup>悲<sup>げ</sup>に、また聞える。

「弱りました。あの<sup>いぬ</sup>狗<sup>には</sup>には。」

と小村さんはまた滅入った。

のしのしみしり、大皿を片手に、そこへ天井を抜きそうに、ぬいと 顕<sup>あらわ</sup>れたのは、  
色の黒い、いが栗<sup>ぐり</sup>で、しるし半纏<sup>ばんてん</sup>の上へ汚れくさった棒<sup>ぼう</sup>縞<sup>じま</sup>の大広袖<sup>おおどてら</sup>を  
はお<sup>お</sup>被<sup>か</sup>った、から脛<sup>すね</sup>の毛だらけ、図体は<sup>おおき</sup>大<sup>お</sup>いが、身の緊<sup>しま</sup>った、腰のしゃんとした、  
鼻の隆い、目の光る……年配は四十<sup>あまり</sup>余<sup>か</sup>で、稼<sup>かせ</sup>盛<sup>ぎ</sup>りの屈<sup>くつきょう</sup>竟<sup>な</sup>な  
さんぞくづら<sup>な</sup>  
山賊面……腰にぼつ込んだ山刀の無いばかり、あの皿は何んだ、ヘッヘッ、生  
首<sup>ふたつ</sup>二<sup>ふたつ</sup>個<sup>ふたつ</sup>受取ろうか、と言いそうな、が、そぐわないのは、<sup>あご</sup>頤<sup>あご</sup>に短<sup>やぎ</sup>い山<sup>やぎ</sup>羊<sup>ひげ</sup>髯<sup>ひげ</sup>であつ  
た。

「御免なせえ……お香のものと、<sup>かかしゆ</sup>媽々衆<sup>かかしゆ</sup>が氣前を見せましたが、取っておきのこの  
奈良漬、こいつあ水<sup>ちゆう</sup>ぼくてちと中<sup>ちゆう</sup>でがす。菜<sup>なが</sup>ッ葉<sup>かぶ</sup>が食えますよ。長<sup>なが</sup>蕪<sup>かぶ</sup>てって、こ  
こら一体の名物で、<sup>おつ</sup>異<sup>おつ</sup>に食えまさ、めしあがれ。——ところで、媽々衆のことづてで  
すがな。せつかく御酒を一つと申されたものを、やけな御辞退で、何だかね、  
なんばん<sup>なんばん</sup> <sup>しびれぐすり</sup>しびれぐすりの<sup>こうやく</sup>膏<sup>こうやく</sup>薬<sup>やく</sup>とか言う三題  
ばなし<sup>あ</sup>  
噺<sup>あ</sup>を逆に行ったような工合で、旦那方のお酒に毒でもありそうな様子<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>が、申  
訳がございません。で、居候の<sup>わっし</sup>私<sup>わっし</sup>に、代理として一杯、いんえただ一つだけ。おし  
るしに頂戴してくれるようにと申すんで、や、も、御覽の<sup>とお</sup>通<sup>とお</sup>、<sup>ぶしつけ</sup>不<sup>ぶしつけ</sup>躰<sup>ふしつけ</sup>ながら<sup>まかり</sup>罷<sup>まかり</sup>  
出ました。実はね、媽々衆、ああ見えて、浮気もんでね、亭主は旅稼ぎで留守なり、こ  
ちらのお若い方のような、おッこちが欲しさに、酒どころか、杯を禁<sup>た</sup>っておりますんでね。  
はッはッはッ。」

はしご  
階子の下から、伸上った声がして、

「馬鹿な事を言わねえもんだ。」

と、むきになると、まるでしの田舎なまり。

しんちゅうだい  
「真 鑰 台 め。」と言った。

「……真鑰台？……」

聞くと……真鑰台、またの名を銀流しの とうすけ 藤 助 と言う、きんぱく 金 箔 つきの鑄掛屋で、こ  
れが三味線の持ぬしであった。つらがまえ 面 構 でも知れる……このしたたかものが、やが  
て涙ぐんで……話したのである。

### 三

わっし  
「私 はね、旦那。まだその時分、宿を取っちゃあいなかったんでございます、居酒

屋、といった処で、豆腐も駄菓子も つつ 突 くるみに売っている、天井に つる とうがらし  
釣した 蕃 椒

の方が、ひ まっか 燈よりは真 赤に目に立つてった、しな 皺 びた店で、ほだ 樽 同然の にしん 練 に、山家

へんぴ きま いわな にびたし ころもがわ くい  
片 鄙はお 極りの石斑魚の 煮 浸、衣 川 で 嚙 しばった武蔵坊弁慶の奥歯

のようなやつをせせりながら、みせさき 店 前 で、やた一きめていた処でございましてね。

わっし ふところあい とりにく  
ちょっと 私 の 懐 中 合 と、鑄掛屋風情のこの容体では、宿が 取 悪 かったん

でございますよ。というのが、やけやま 焼 山 の下で、パッと一くべ、おへっつい様を燃したも

同じで、山を越しちゃあ、別に騒動も聞えなかったんでございますが、五日ばかり前に、

その温泉に火事がありました。ために、木賃らしい、この方に柄相当のなんぞ焼けて

いて、二三軒残ったのは、いずれも玄関附だからちとたじろいだ次第なんでござい  
ますが。

ええ……温泉でございますか、名は体をあらわすとか言います、とんだ<sup>やまなか</sup>山中で、  
……狼温泉——」

「ああ、どこか、<sup>みつみねさん</sup>三峰山の近所ですか。」

と、かつて美術学校の学生時代に、そのお山へ<sup>ぬけまい</sup>抜参りをして、狼よりも旅費の  
不足で、したたか<sup>こわ</sup>可恐い思いをした小村さんは、<sup>ききおじ</sup>聞きおじをして口を入れた……<sup>か</sup>噛む  
がごとく杯を<sup>ふく</sup>銜みながら、

「あすこじゃあ、お<sup>いぬさま</sup>狗様と言わないと山番に叱られますよ。」

藤助は真顔で、<sup>ほろよい</sup>微酔の<sup>かぶり</sup>頭を<sup>ふ</sup>掉った。

「途方もねえ、見当違い、山また山を<sup>はるか</sup>遥に離れた、峰々、谷々……と言えばね、  
山の中に島々と言う処がありまさ、おかしいね。いやもっと、深い、松本から七里も  
おく<sup>ひだ</sup>深へ入った、飛驒の山中——心細い処で……それでも小学校もありや、郵便局もあ  
りましたっけが、それなんぞも焼けていたんでございましてね。

山坂を踏越えて、少々<sup>たいら</sup>平な盆地になった、その温泉場へ入りますと、<sup>ひざた</sup>火沙汰は  
また格別、……<sup>ひど</sup>酷いもので、村はずれには、落葉、枯葉、焼灰に交って、<sup>ほおじろ</sup>頬白、  
やまがら<sup>ひわ</sup>ひわ<sup>こがら</sup>こがら<sup>あか</sup>あか  
山雀、鶺鴒、小雀などと言う、紅だ、青だ、黄色だわ、紫の毛も交って、あの綺  
麗な小鳥どもが、<sup>みちばた</sup>路傍にはらはらと落ちている。こいつあ、それ、時節が今頃にな  
りますと、よく、この信州路、木曾街道の山家には、暗い軒に、糸で編んで、ぶら下げ

てまり もつ  
て、美しい手鞠が縫れたように売ってるやつだて。それが、お前さん、火事騒ぎに  
散らかったんで——驚いたのは、中に交って、おしどり つがい  
鴛鴦が二羽…… 番 かね。……  
や、頂きます、ト、ト、ごぜえやさ。」

ふた おおき てのひら  
と小村さんの酌を、蓋 するような 大 な 掌 で請けながら、  
「どうもね、捨って抱きたいようでがしたぜ。まさか、池に泳いだり、樹に眠ったのが、  
火の粉を浴びはしますめえ。売ものが散らばりましたか、まっか そま  
真 赤に 染 った木の葉を  
枕で、目を眠っていましたよ。

ちゅうのり  
天秤棒一本で、天井へ 宙 乗 でもするように、ふらふらふらふら、山から山を  
へめぐ  
経 歴 して……ええちょうど去年の今月、日は、もつと末へ寄っておりましたが——こ

もみじ まっさいちゅう にじ み  
の緋葉の 真 最 中、草も雲も 虹 のような彩色の中を、飽くほど 視 て 通 った

わっし とま  
私 もね、これには足が 停 りました。

ひとえ うっす  
なんと……綺麗な、その翼の上も、一重敷いて、薄 り、白くなりました。この景

かわ おしどり  
色に舞台が 換 って、雪の下から 鴛鴦 の精霊が、鬼火をちらちらと燃しながら、す

せりあが おんな わっし  
つと 糶 上 ったようにね、お前さん……唯今の、その二人の 婦 が、私 の目に

すご  
映りました。 凄 いように美しゅうがした。」

やわらか あらた み  
と鑄掛屋は、肩を 軟 に、胸を低うして、更 めて私たち二人を視たが、

かか くだん  
「で、山路へ 掛 る、狼温泉の出口を通るんでございますが、場所はソレ 件 の盆

わっし ありあいおんさかな きま  
地だ。私 が飲んでいました 有 合 御 肴 というお 極 りの一膳めしの前なん

はらっぱ  
ざ、小さな 原 場 ぐらい小広うございますのに——それでも左右へ並ばないで、

あとさき  
前後前になって、ずっと連立って通ります。

前へ立ったのは、蓑みのを着て、竹の子笠を冠かぶっていました。……端折った

かたづま ゆうぜん わら すそ いなたば  
片かたづま襦ゆうぜんの友わら染すそが、藁わらの裙すそに優しくこぼれる、稲いなたば束ばの根に嫁菜いなたばが咲いた

といった形。ふっさりとした銀いちょうがえし杏みみもと返がが耳みみもと許がへばらりと乱れて、道具は少し大きゅうがすが、背がすらりとしているから、その眉毛の濃いのも、よく釣合って、抜ける

ほど色が白い、ちと大柄ではありますが、いかにも体つきのしなやか おんな嫋しなやか娜おんなな婦おんなで、  
(今晚は。)

とおりかか  
と、通と掛りりに、めし屋へ声を掛けて行きました。が、※ [#「火+發」、174-5]と燃

たいまつ  
えてる松たいまつ明その火で、おくれ毛へ、こう、雪の散るのが、白い、その頬を殺ぐようで、

あざやか  
鮮あざやか麗あざやかに見えて、いたいたい。

いたいたいと言え、それがね、素足に上うわぞうり草履やどや。あの、旅は店はで廊下を穿かせ

はなお  
る赤い端はなお緒はなおの立ったやつで——しっとりとちと沈んだくらい落ち着いたおんな婦おんななんだが、

実際その、心も空になるほど気もの揉めるわけがあつて——思い掛けず降出した雪に、

足駄わらじでなし、草鞋わらじでなし、中ぶらりに右のつかばきかけばき穿ばきで、ストンと落ちるように、旅

館から、上草履おつかで出たと見えます。……その癖、一生の晴着おつかというので、母おつかさん

譲りの裙模様もんつき、紋もんつき着もんつきなんか着ていました。

お話をしますうちに、仔細しさいは追々おわかりになりますが——これが何でさ、双葉屋

と言って、土地での、まず一等旅館の女中で、お道さんと言う別べっぴん嬪べっぴん、以前で申せ

ゆな  
ば湯女なんだ。

ゆな みと おく  
いや、湯女に見惚れていて、肝心の御婦人が後れました。もう一人の方は、

さざんか てぬぐい  
山茶花と小菊の花の飛模様のコートを着て、白地の手拭を吹流しの……妙な

こしらえ いと ゆいた  
拵だと思えば……道理こそ、降りかゝる雪を厭ったも。お前さん、いま結立て

と見える高島田の水の滴りそうなのに、対に照った鼈甲の花筭、花櫛

こしらえ  
——この拵じゃあ、白襟に相違ねえ。お化粧も濃く、紅もさしたが、なぜか顔の

色が透き通りそうに血が澄んで、品のいいのが寂しく見えます。華奢な事は、吹つ

けるほどではなくても、雪を持った向風にや、傘も洋傘も持切れませえ、

かぶ ゆな うつむ ゆ  
被りもしないで、湯女と同じ竹の子笠を胸へ取って、襟を伏せて、俯向いて行きま

す。……袖の下には、お位牌を抱いて葬礼の施主に立ったようで、こう[≠「こう」

は底本では「かう」]正しく端然とした処は、視る目に、神々しゅうございます。何となく

ようす あたり  
容子が四辺を沈めて、陰気だけれど、気高いんでございますよ。

あお こたつ  
同じ人間もな……鑄掛屋を一人土間で飲らして、納戸の炬燵に潜込んだ、一せ

ばばかか てあい  
ん飯の婆々媽々などと言う徒は、お道さんの(今晚は。)にただ、(ふわ、)と言っ

たきりだ。顔も出さねえ。その(ふわ、)がね、何の事アねえ、鼠の穴から古綿が千断ちぎ  
れて出たようだ。」

いた  
「ちと耳が疼いだな。」

と饅頭屋の女房が口を入れた、——女房は鑄掛屋の話に引かれて、二階の座に加わっていたのである。

「そのかわり大まかなものだよ。店の客人が、飲さしの二合<sup>びん</sup>と、もう一本、棚よりひっさら引<sup>ひっさら</sup>攫<sup>引</sup>って、こいつを、井へ突<sup>つっこ</sup>込んで、しばらくして、婦<sup>おんな</sup>人たちのあとを追ってぶらりと出て行くのに、何とも言わねえ。山は深い、旦那方のおっしゃる、それ、何とかって、山中暦日なしじゃあねえ、狼温泉なんざ、いつもお正月で、人間がめでてえね。」

「ははあ。」

「成程。」

私たちは、そんな事は<sup>あだ</sup>徒<sup>あだ</sup>に聞いて、さきを急いだ。

「荷はどうしたよ。」

と女房が笑って言った。

「ほい忘れた。いや、忘れたんじゃあねえ、一ぜん飯に<sup>おきっぱな</sup>置<sup>おき</sup>放<sup>っぱな</sup>しよ。」

「それ見たか、あんな三味線だって、<sup>びんづめ</sup>壇<sup>びんづめ</sup>詰<sup>づめ</sup>二升ぐらいな値はあるでござんさあ、なあ、旦那方。」

「うむ、まったくな。」

と藤助は額を<sup>おさ</sup>押<sup>おさ</sup>えて、

「おめでてえのはこっちだっけ、はッはッはッ。」

#### 四

「さて旦那方、洒<sup>しゃれ</sup>落<sup>じょうだん</sup>や串<sup>じょうだん</sup>戯<sup>じょうだん</sup>じゃあねえんでございます。……御覧の通り人間の中の変な<sup>きのこ</sup>蕈<sup>きのこ</sup>のような、こんな野郎にも、不思議なまわり合せで、その<sup>おんな</sup>婦<sup>おんな</sup>たちのあとを尾<sup>つ</sup>けて行<sup>ゆ</sup>かなければならねえ一役ついていたのでございましてね。……

のりかか 乗 掛 った船だ。鬱陶<sup>うっとう</sup>しくもお聞きなせえ。」

すつとこ 被<sup>かぶ</sup> りで、

襟を 敲<sup>たた</sup> いて、

「どんつくだで出ましたわ……見えがくれに行く段取だから、急ぐにや当らねえ。別して

さき 先方は足弱だ。はてな、ここに色鳥の小鳥の空<sup>うつせみ</sup> 蝉、鴛鴦<sup>おしどり</sup> の亡骸<sup>なきがら</sup> と言うの

が有ったつけど、酒の勢<sup>いきおい</sup>、雪なんざ苦にならねえが、赤い鼻尖<sup>はなさき</sup> を、

ほおかぶり 頬<sup>ほお</sup> 被<sup>かぶ</sup> りから突出して、へっぴり腰で嗅ぐ工合は、夜興引の翁<sup>よこひき</sup> 爺<sup>じい</sup> が穴一のばら

ぜに 銭<sup>ぜに</sup> を探すようだ。余計な事でございますがね——性<sup>しょう</sup> が知れちゃいまして、何だ

か、おんな 婦<sup>おんな</sup> の二人の姿が、鴛鴦の魂がスッと抜出したようでなりませんや。この辺だつ

けど、今度は、雪まじりに鳥の羽より焼屑<sup>やけくず</sup> が堆<sup>うずたか</sup> い処を見着けて、お手向に

ね、壘<sup>びん</sup> の口からお酒を一雫<sup>ひとしずく</sup> と思いましたが、待てよと私<sup>わっし</sup> あ考えた、正覚坊

じゃアあるめえし、鴛鴦が酒を飲むやら、飲ねえやら。いっその事だと、手前の口へね、

らつば や 喇叭<sup>らつば</sup> と遣った……こうすりゃ鳥の精がめしあがると同じ事だと……何しろ腹ン中は

鴛鴦で一杯でございました。」

女房が 肥<sup>ふと</sup> った膝で、畳に当って、

「藤助さんよ。」

「ああ。」

「酒の話じゃあないじゃあないかね、ねえ、旦那方。」

「何しろ、そこで。」

と、促せば、

「と二人はもう雑木林の崖に添って、上りを山<sup>やまみち</sup>路<sup>かか</sup>に懸<sup>か</sup>っています。白い中を、ふつと、真<sup>まっか</sup>紅<sup>か</sup>な鳥のたつように、向うへ行<sup>ゆ</sup>く。……一軒、家だか、穴だか知れねえ、えた、非人の住んでいそうな、引<sup>ひっかし</sup>傾<sup>か</sup>いた小屋に、筵<sup>むしろ</sup>を二枚ぶら下げて、こいつが戸になる……横の羽目に、半分ちぎれた浪<sup>なにわぶし</sup>花<sup>びら</sup>節<sup>びら</sup>の比羅がめらめらと動いているのがありました、それが宿<sup>しゆく</sup>はずれで、もう山になります。峠を越すまで、当分のうち家らしいものはございませんや。

水の音が聞えます。ちよろちよろ水が、青いように冷く走る。山清水の<sup>こながれ</sup>小<sup>こ</sup>流<sup>り</sup>のへりについてあとを慕いながら、いい程合で、透かして見ると、坂も大分急になったいしころみち<sup>いしころみち</sup>石<sup>いし</sup>で、誰がどっちのを解いたか、扱<sup>しごき</sup>帯<sup>ひ</sup>をな、一<sup>ひとすじ</sup>条<sup>じゆな</sup>、湯女の手から後<sup>うしろ</sup>に取って、それをその<sup>わか</sup>少<sup>す</sup>い貴婦人てった高島田のが、片手に控えて<sup>すが</sup>縫<sup>ぬい</sup>っています……もう笠は外して脊へ掛けて……<sup>しぼり</sup>絞<sup>あか</sup>の<sup>たいまつ</sup>紅<sup>あか</sup>いのがね、松<sup>たいまつ</sup>明<sup>あか</sup>が揺れる度に、雪に薄紫に<sup>さっさ</sup>颯<sup>さ</sup>と<sup>らせん</sup>冴<sup>みちすじ</sup>えながら、螺旋の道<sup>うね</sup>条<sup>うね</sup>にこう<sup>うね</sup>敵<sup>うね</sup>ると、そのたびに、崖のもみじ<sup>もみじ</sup>緋<sup>あか</sup>葉<sup>あか</sup>がちらちらと映りました、夢のようだ。

み<sup>み</sup>やつ<sup>やつ</sup>視<sup>み</sup>る<sup>やつ</sup>奴<sup>やつ</sup>の方が夢のようだから、御当人たちは<sup>うつつ</sup>現<sup>うつつ</sup>かも知れねえ。

でその二人は、そうやって、雪の夜道を山坂かけて、どこへ行くんだと思<sup>おぼしめ</sup>召<sup>め</sup>す。ここだて——旦那。」

いきつぎ<sup>いきつぎ</sup>ぐい<sup>ぐい</sup>あお<sup>あお</sup>藤助は息<sup>いきつぎ</sup>継<sup>ぐい</sup>に呷<sup>あお</sup>と煽<sup>あお</sup>って、

「この二階から、鏡台山を——(少し薄明りが映しますぜ、月が出ましょう。まあ、<sup>ごゆる</sup>御<sup>ごゆる</sup>緩<sup>ごゆる</sup>りなさいまし、)——それ、こうやって視<sup>み</sup>る<sup>み</sup>ように、狼温泉の宿はずれの坂から

横正面といった、肩でこねじむう捻ねじむ向いて高く上を視る処に、耳はねえが、あのランプの  
ハート形にかしら頭おったを押ふくろ立たけったとな鼻なヶな嶽な、鼻、鼻と一口にとな称なえて、何嶽と言うほど  
じゃねえ、丘がひとくら一てっぺん座しゅもくづえ、その頂しゅもくづえ辺しゅもくづえに、天狗の撞しゅもくづえ木しゅもくづえ杖しゅもくづえといった形に見える、柱  
が一本。……風の吹まわしで、松明のさき尖さきがあらわぼつと伸あらわびると、白あらわくなってあらわ顕あらわれる時  
は、ヤソ耶穌の看板の十字架ヤソてつたやつにも似ている……こりゃ、もし、電信柱で。

蔭に隠れて見えねえけれど、そこにひとはりテント一ひとはりテント張ひとはりテント天幕ひとはりテントがあります。何だと言うと、火事で  
焼けたがために、仮ごしらえの電信局で、温泉場から、そこへでは出張ではっているのでござ  
います。

そこへ行くんだね、おんな婦おんな二人は。

で、その郵便局の天幕のうち裡うちに、この湯女の別ゆな嬪べっぴんが、生命がけ二年越いのちに思ごし  
い詰めている技手の先生……ともう一人は、上州高崎のおおかねもち大おおかねもち資おおかねもち産おおかねもち家おおかねもちの若旦那で、  
この高島田のお嬢さんの婿さんと、その二人が、いわれあって、二人を待って、対の  
ててぼてこていてしてづてきて  
手て戟ての石て突てをつてかてないてばかり、洋服を着た、毘びしゃびもんびてんび、ぞぞうぞちぞょうぞてんぞ  
う形で、五体をし緊しめて、殺いき気いきを含いきんで、呼いき吸いきをいき詰いきめて、待いき構いきえているいきんでがしてな。  
お嬢さんの方は、名を縫子さんと言うんで、申さずとも娘おッお子おじゃありません、こりゃ  
ごしんぞ御ご新ご姐しんぞ……じゃあねえね——若ご奥しんぞ様。」

峰の白雪、<sup>ふもと</sup>麓の氷、  
今は互に隔てていれど、  
やがて嬉しく、溶けて流れて、  
合うのじゃわいな。……

わっし <sup>テントばり</sup>  
「私 は日暮前に、その天幕張の郵便局の前を通過して来たんでございますよ。

……ちょうど狼の温泉へ入<sup>いりこ</sup>込みます途中でな。……晩に雪が来ようなどとは思っても

着かねえ、小<sup>こはるびより</sup>春日和<sup>い</sup>といった、ぽかぽかした好い天気。……

もともと、甲州から木曾街道、信州路を掛けちゃあ、<sup>ふもと</sup>麓<sup>えだみち</sup>の岐路<sup>てんびん</sup>を、天秤  
で、てくてくて、<sup>みちばた</sup>路傍<sup>しょう</sup>の木の葉がね、あれ<sup>しょう</sup>性の、いい女の、ぽうとなって少し唇  
の乾いたという容<sup>ようす</sup>子で、へりを白くして、日<sup>ひなた</sup>向にほかほかして、草も乾<sup>はしや</sup>燥いで、  
足のうらが<sup>くすぐ</sup>撥<sup>やり</sup>ってえ、といった陽気でいながら、槍、穂高、大天井、やけに<sup>やけ</sup>焼<sup>ケ</sup>  
嶽などという、大<sup>おおざつま</sup>薩<sup>すご</sup>摩でもの<sup>かさな</sup>凄<sup>かさな</sup>いのが、雲の上に<sup>かさな</sup>重<sup>かさな</sup>って、天に、大波を立て  
ている、……裏の峰が、たちまち<sup>さつ</sup>颯<sup>さつ</sup>と暗くなって、雲が<sup>かぶ</sup>被<sup>かぶ</sup>ったと思うと、箕<sup>み</sup>で<sup>あお</sup>煽<sup>あお</sup>  
ように前の峰へ<sup>うね</sup>畝<sup>うね</sup>りを立ててあびせ掛けると、浴びせておいて晴れると思えば、そ  
の裏の峰がもう晴れた処から、ひだを取って白くなります。見る見るうちに雪が<sup>かか</sup>掛<sup>かか</sup>  
るんでございましてね。左右の山は、紅くなったり、黄色かったり、酔ったり、醒<sup>さ</sup>めたりし  
て、移って来るそのむら雲を待っている。

わけ <sup>おおき</sup> <sup>ひぎょう</sup>  
といった次第で、雪の神様が、黒雲の中を、大<sup>おおき</sup>な袖を開いて、虚空を飛<sup>ひぎょう</sup>行<sup>ひぎょう</sup>な  
さる姿が、遠くのその日向の路に、<sup>ばった</sup>蠡<sup>ばった</sup>斯<sup>ばった</sup>ほどの小さな旅のものに、ありありと拝まれ

ます。

だから、日向で汗ばむくらいだと言った処で、雑樹一株隔てた中には、草の枯れたのに、日が映すかと思えば、何、瑠璃色に小さく凝った竜胆が、日中も冷たい白い霜を囓っています。

が、陽の赤い、その時鼻ヶ嶽は、猫が日向ぼっこをしたような形で、例の、草鞋もきやはんくすぐ脚絆も擦ってえ。……満山のもみじのうち、もくりと一つ、道も白く乾いて、枯草がぽかぽかする。……芳しい落葉の香のする日の影を、まともに吸って、くしゃみが出そうなのを獅噛面で、  
(鑄掛……錠前の直し。)

すくッと立った電信柱に添って、片枝折れた松が一株、崖へのしかかって立っています、天幕張だろうが、掘立小屋だろうが、人さえ住んでいれば家業冥利……  
(鑄掛……錠前直し。)

と、天幕とその松のあります、ちょっと小高くなった築山てった下を……温泉場の屋根を黒く小さく下に見て、通りがかりに、じろり……」

藤助は、ぎょろりとしながら、頬辺を平手で敲いて、  
「この人相だ、お前さん、じろりとよりか言いようはねえてね、ト行った時、はじめて見たのが湯女のその別嬪だ。お道さんは、半襟の掛った縞の着ものに、前垂掛、  
昼夜帯、若い世話女房といった形で、その髪の毛のいい、垢抜のした白い顔を、神妙  
に俯向いて、籠末な椅子に掛けて、卓子に凭掛けて、足袋を繕っていましたよ、紺足袋を……」

(鑄掛……錠前の直し。)……

ちょっと顔を上げて見ましたっけ。直<sup>すぐ</sup>に、じっと足袋を刺すだて。

動<sup>い</sup>ただけになお活きて、光沢を持った、きめの細<sup>こまか</sup>な襟脚の好き<sup>よ</sup>ななんと云っちゃねえ。……通り切れるもんじゃあねえてね、お前さん、雲だか、風だか、ふらふらと野道山道宿なしの身のほまちだ。

ひとこと  
一 言<sup>い</sup>ぐらい口を利いて、渋茶の一杯も、あのお手からと思いましたがね、ぎよつとしたのは半分焦げたなりで天幕の端に真<sup>まっすぐ</sup>直<sup>まっすぐ</sup>に立った看板だ。電信局としてある……

茶屋小屋、出茶屋のねえ<sup>ねえ</sup>姉<sup>なりふり</sup>さんじゃあねえ。風俗はこの目で確<sup>たしか</sup>に睨<sup>にら</sup>んだが……おやおや、お役人の奥様かい。……郵便局員の御夫人かな。

これが旦那方だと仔細<sup>しさい</sup>ねえ。湯茶の無心も雑作はねえ。西行法師なら歌をよみかける処だが、山家めぐりの鑄掛屋じゃあ道を聞くのも跋<sup>ばつ</sup>が変だ。

ところで、椅子はまだ二三脚、何だか、こちとらにや分らねえが、ぴかぴか機械を据<sup>テエブル</sup>附けた卓<sup>卓</sup>子<sup>子</sup>がもう一台。向ってきちんと椅子が置いてあるが、役人らしいのは影も見えねえ。

ははあ、来る道で、向<sup>むこう</sup>の小山の土手腹<sup>どてっばら</sup>に伝わった、電信の鋼<sup>はりがね</sup>線の下あたりを、木の葉の中に現れて、茶色の洋服で棒のようなものを持って、毛虫が動くように小さく歩<sup>ある</sup>行<sup>み</sup>いている形を視た。……鉄砲打の鳥おどしかと思ったが、大きにそんなのが局員の先生で、この姉さんの旦那かも知れねえよ。

が何しろ留守だ。

(鑄掛……錠前直し。)……

と崖ぶちの日向に立ったが、紺足袋の繕い。……雪の襟脚、白い手だ。悚然とするほど身に沁みてなりませんや。

はるか遥に見える高山の、かげって桔梗色したのが、ずっと雪を被いでいるにつけても。で、そこへまず荷をおろしました。

(や、えいとこさ。)と、草鞋の裏が空へ翻るまで、山端へどっしりと、暖かい木の葉に腰を落した。

間拍子もきっかけも渡らねえから、ソレ向うの嶽の雪を視ながら、  
(ああ、降ったる雪かな。)

とか何とか、うろ覚えのひとりごとを言っってね、お前さん、

(それ、雪は鵝毛に似て飛んで散乱し、人は鶴を着て立って徘徊すと言えり……か。)

なんのって、ひらひらと来る紅色の葉から、すぐに吸いつけるように煙草を吹かした。が、何分にも鑄掛屋じゃあ納りませんな。

ところでさて、首に巻いた手拭を取って、払いて、馬土にも衣裳だ、芳原かぶりと気取りましたさ。古三味線を、チンとかツンとか引掻鳴らして、ここで、内証で唄ったやつでさ。

峰の白雪、麓の氷――

旦那、顔を見つこなし……極が悪い……何と、もし、これで別嬪の姉さんを引寄せようという腹だ、おかしな腹だ、狸の腹だね。

だが、こいつあちとら徒の、すなわち狸の腹鼓という甘術でね。不気味でも、

きざ  
気障でも、何でも、聞く耳を立てるうちに、うかうかと釣出されずにやいねえんだね。ど  
うですえ、……それ、来ました。」

はしごだん  
と不意に振向く、階子段の暗い穴。

ぞっと  
小村さんも私も慄然した。

女房はなおの事……

びっくり  
「あれ、吃驚した。」

すりよ  
と膝で摺寄る。

藤助は一笑して、

「まずは、この寸法でございましてね、お道さんを引寄せた工合というのが、あはッは  
ッ。」

## 六

ふりとおやま  
「見ない振、知らない振、雪の遠山に向いて、……溶けて流れてと、唄っていな

うしろ  
がら、後方へ来るのが自然と分るね、鹿の寄るのとは違います。……別嬪の香

きりょう おんながみさま  
がほんのりで、縹緞に打たれて身に沁む工合が、温泉の女神様が世話に

あらわ  
砕けて顕れたようでしたぜ。……(逢いたさに見たさに)何とか唄って、チ  
ヤンと句切ると、

(あの、鑄掛屋さん。)

はつね  
と、初音だね。……

み 視ると、朱塗の盆に、吸<sup>きびしよ</sup>子、茶碗を添えて持っている。黒<sup>くろじゆす</sup>繻子の引<sup>ひっかけ</sup>掛<sup>おび</sup>帯

で、浅<sup>あさぎ</sup>葱の襟のその様子が何とも言えねえ。

いえ、もう一つ、盆の上に、紙に包んだ蝶々というのが載<sup>の</sup>っていました。……それが

ために讚めるんじゃあねえけれど、拵<sup>ほ</sup>えねえで、なまめいたもんでしたぜ。人を喰

ったこっちの芳原かぶりなんざ、もの欲しそうで極<sup>きま</sup>りが悪くなったくらいで。

(へい、へい、へい、こりゃ奥様、恐入りました。)

とわざとらしくも、茶碗をな、両手で頂かずにやいられなかった。

ねえ<sup>ねえ</sup>姉さんが、初々しい、しおらしい事を、お聞きなせえ、ぽうツとなって、

(まあ、あんな事、私は奉公人なんですよ。)

さ、その奉公人風情が、生意気のようにだけれど、唄をもう一つ唄って聞かしてもらえ

まいか、と言うんじゃありませんかい。お<sup>あつらえ</sup>眺<sup>あつらえ</sup>が注文にはまった。こんな処でよろ

しければ、山で樹の数、幾つだって構やあしませんと、……今度は(浮世はなれて奥

山ずまい、恋もりん気も忘れていたが、)……で御機嫌を取結ぶと、それよりか、やっ

ぱり、先<sup>せん</sup>の(やがて嬉しく溶けて流れて合うのじゃわいな)の方を聞かして欲しいと、

山姫様、御意遊ばす。」

藤助は杯でちよつと句切って、眉も口も引<sup>ひきしま</sup>緊<sup>ひきしま</sup>った。

「旦那方の前でございませうがね、こう中腰に、しめ<sup>しめかげん</sup>加<sup>い</sup>減<sup>い</sup>の好い帯腰で、下に居て、

白い細い指の先を、染めた草につくようにして<sup>じっ</sup>熟<sup>じっ</sup>と聞く。……聞手が、聞手だ。唄う

方も身につまされて、これでもお前さん、人間<sup>づきええ</sup>交<sup>づきええ</sup>際<sup>づきええ</sup>もすりゃ、女<sup>でいり</sup>出<sup>でいり</sup>入<sup>でいり</sup>も知らねえじ

やあねえ。<sup>わか</sup>少<sup>わか</sup>い時を思い出して、何となく、我身ながら引入れられて、……覚えて、

ついぞねえ、一生に一度だ。<sup>くら</sup>較べものにやありませんが、むかし<sup>びわほうし</sup>琵琶法師の名誉  
なのが、こんな処で草枕、山の神様に一曲奏でた心持。

と姉さんがとけて流れて合うのじゃわいなと、きき入りながら、<sup>まつげ</sup>睫毛を長くうつむい  
て、ほろりとした時、こつらも思わず、つい、ほろり……いえさ、この<sup>つら</sup>面だからポタリと  
出ました。」

と口では言いつつ声が湿った。

「(つかん事を聞きますけれど、<sup>あいかぎ</sup>鑄掛屋さん、錠の合鍵を頼まれて下さいます  
か。)……と姉さんがね。

<sup>わっし</sup>私 あこれを聞いて、ポンと両手<sup>う</sup>を拍った。

このくらいつく事は、私の唄が三味線につくようなもんじゃあねえ。

(鍵が狂ったんでございますかい。)

(いいえ、無いんですけれど。)

(雑作はがあせん、煙草三服飲む<sup>うち</sup>間だ。)

そこで錠前を見て、という事になると、ちと内証事らしい。……しとやかな姉さんが、  
急に何だか、そわついて、あっちこっちしましたが、高い処にこう立つと、風が<sup>さら</sup>攫って、  
すっと、雲の上へ持って行きそう<sup>ゆ</sup>で<sup>あぶな</sup>危ツかしいように見えます。

勿論人影は、ぽつりともない。

が、それでも、<sup>テント</sup>天幕の正面からじゃあ、<sup>きとが</sup>気咎めがしたと見えて、  
(済みませんが、こっちから。)

裏へ廻ると、<sup>ほころ</sup>綻びた処があるので。……姉さんは<sup>しな</sup>科よく消えたが、こっちは

じらいや 自雷也の妖術にアリアアリアだね。せこ 列子という身で はいこ 這込みました。が、それどころじ

ゃあねえ。この錠前だと言うのを一見に及ぶと、片隅に立掛けた奴だが、おおがま おおがまの  
干物とも、かば みいら たと 河馬の木乃伊とも せよ 警えようのねえ、しな つっぱ はげまだら 皺びて突張って、兀斑の、  
でっ かばん 大古物の大かい革靴で。

こいつを、古新聞で包んで、へこおび 薄汚れた兵児帯でぐるぐると巻いてあるんだが、結び  
めは、はずれて緩んで、新聞もばさりと裂けた。そこからそれ、すす 煤を噴きそうな つら 面  
を出して、あし ずい のぞ 蘆の茎から谷覗くと、まっくろ 鍵の穴を真黒に窪ましているじゃありませんか。

(何が入っておりますえ。)

失礼な……人様の革靴を……だが、わっし 私 あつい、うっかり言った。

(あの、旦那さんのお大事なものばかり。)

あなた (へい、貴女のお旦那様の?)

(いいえ、技師の先生の方ですが、その方のお大事なものが残らず、お国でおかくれ

になりました奥様のおこつ 骨も、たったお一人っ子の、かけがえのない坊ちゃまのお骨も、  
この中に入っていらっしゃるんですって。)

と、こう言うんですね。」

小村さんと私は、黙って気を引いて瞳を合した。

藤助は一息ついて、

「それを聞いて、安心をしたくらいだ。技師の旦那の奥様と坊ちゃまのお骨と聞いて、

安心したも、おかしなものでございますがね、一軒家の ばけつづら 化葛籠だ、天幕の中の大

革靴じゃあ、<sup>うち</sup>中に何が入ってるか薄気味が悪かったんで。

(へい、その鍵をおなくしなすった……そいつはお困りで、)

と錠前の寸法を当りながら、こう見ますとね、新聞のまだ残った処に、<sup>あおさび</sup>青錆にさ  
びた金具の口でくいしめた革靴の中から、紫の袖が一枚。……

<sup>たもと</sup>袂が中に、袖口をすんなり、白羽二重の裏が<sup>いきいき</sup>生々と、女の<sup>はだ</sup>膚を包んだよう  
で、<sup>き</sup>被た人がらも思われる、裏が通って、<sup>あげは</sup>揚羽の蝶の紋がちらちらと羽を動かすよう  
に見えました。」

小村さんと私とは、じっと見合っていたままの互の唇がぶるぶると震えたのである。

## 七

——実はこの時から数えて前々年の秋、おなじ小村さんと、(<sup>つれ</sup>連がもう一人あつ  
た。)三人連で、<sup>うすい</sup>軽井沢、<sup>うち</sup>碓氷の<sup>うすい</sup>もみじを見た汽車の<sup>うち</sup>中に、まさしく間違うまい、こ  
れに就いた事実があつて、私は、<sup>ふつつか</sup>不束ながら、はじめ、<sup>かばん</sup>淑女画報に、「<sup>うち</sup>革靴の  
怪。」後に「<sup>うち</sup>片袖。」と改題して、小集の<sup>うち</sup>中に編んだ一篇を草した事がある。

<sup>たしか</sup>碓に紫の袖の紋も、揚羽の蝶と覚えている。高島田に<sup>はなこうがい</sup>花筭の、盛装し  
た嫁入姿の<sup>ようちょう</sup>窈窕たる淑女が、その嫁御寮に似もつかぬ、<sup>けん</sup>卑しげな慳のある女  
親まじりに、七八人の附添とともに、<sup>ふかや</sup>深谷駅から同じ室に乗組んで、御寮はちょうど  
私たちの真向うの席に就いた。まさに嫁がんとする娘の、嬉しさと、恥らいと、

<sup>こころやり</sup>心遣と、<sup>おそれ</sup>恐怖と、<sup>えみ</sup>笑と、涙とは、そのまま膝に手を重ねて、つむりを重たげに、

ただ肩を細く、さしうつむいた黒髪に包んで、顔も上げない。まことにしとやかな佳人であった。

この片袖が、隣席にさし置かれた、他の大革靴の口に挟まったのである。……失礼ながらその革靴は、ここに藤助が饒舌<sup>しゃべ</sup>のと、ほぼ大差のないものであった。

が、持ぬしは、意気沈んで、髯<sup>ひげ</sup>、髪もぶしょうにのび、面<sup>おもて</sup>は憔悴<sup>しょうすい</sup>はしていたが、素純にして、しかも謹厳なる人物であった。

汽車の進行中に、この出来事が発見された時、附添の騒ぎ方は……無理もないが、思わぬ<sup>そそう</sup> 塵<sup>はた</sup>であろう、失策した人物に対して、傍<sup>むし</sup>の見る目は寧ろ気の毒なほどであった。

一も二もない、したたかに詫びて、その革靴の口を開くので、事は決着するに相違あるまい。

我も人も、しかあるべく信じた。

しかるにもかかわらず、その人物は、人々が騒いで掛けた革靴の手の中から、すかにぎりこぶし<sup>ひと</sup>の手を抜くと齊しく、列車の内へすつくと立って、日に焼けた面<sup>つら</sup>はかわら<sup>たそが</sup> 瓦<sup>か</sup>の黄昏るごとく色を変えながら、決然たる態度で、同室の御婦人、紳士の

方々、と室内に向って、掠<sup>かすれごえ</sup>声<sup>こゑ</sup>して言った。……これなる窈窕たる淑女(——私も

ここにその人物の言った<sup>ことば</sup> 言<sup>ことば</sup>を、そのまま引用したのであるが)窈窕たる淑女のは

れ着の袖を<sup>おか</sup> 侵<sup>つかみだ</sup>したのは偶然の<sup>おか</sup> 塵<sup>つかみだ</sup>である。はじめは旅行案内を<sup>つかみだ</sup> 搦<sup>つかみだ</sup>出して、それを投込んで錠を下した時に、うっかり挟んだものと思われる。が、それを心着いた時

は——と云って<sup>たらたら</sup> 垂<sup>たらたら</sup>々と額に流る汗を<sup>ぬぐ</sup> 拭<sup>ぬぐ</sup>って——ただ一瞬間に千万無量、

ばんごう<sup>ばんごう</sup> 万<sup>ばんごう</sup>劫<sup>ばんごう</sup>の煩惱を起した。いかに思い、いかに想っても、この窈窕たる淑女は、まさ<sup>まさ</sup>し

ひと  
く他に嫁せらるるのである……ばかりでない、次か、あるいはその次のステーション 停車場  
にて下車なさるとともにたちまち令夫人とならるる、その片袖である。自分は生命を  
掛けて恋した、生命を掛くるのみか、罪はまさに死である、死すともこの革靴の片袖  
はあえて離すまいと思う。思い切って鍵を棄てました。わたくし 私 はこの窓から、はるか 遥  
に北の天に、雪を銀欄のごとく刺 繡した、あの 遠 山 えんざん の頂を望んで、ほとんど無  
辺際に投げたのです、と言った。

——汽車は 赤城山 あかぎさん をその たつみ 巽 の窓に望んで、広漠たる原野の末を貫いてい  
たのであった。——

かれ  
渠は電信技師である。たつのりゅうざぶろう たつ のりゅうざぶろう なの かれ  
も何もない、最愛の 子 こ を失い、最愛の妻を失って、世を 果 敢 むの余り、その妻と子  
の白骨と、ともに、失うべからざるものの一式、余さずこの古革靴に納めた、むしろ我  
が みひとつ けいぜん 孤 の 瑩 然 たる影をも納めて、野に山に棄つるがごとく、絶所、 僻 境 へききょう  
を望んで飛驒山中の電信局へ唯今赴任する途中である。すでに我身ながら葬り去っ  
た身は、ここに片袖とともに よみがえ 蘇 生 った。蘇生ると同時に、罪は死である。いや 否、死  
はなお 容 易い、天の 咎 とが 、地の 責 せめ 、人の 制 規 おきて、いかなる制裁といえども、甘んじ  
て覚悟して相受ける。各位が、わが 我 ために刑を撰んで、その最も酷なのは、 はりつけ 磔  
でない、獄門でない、うしざき 牛 裂 の極刑でもない。この片袖を挟んだ古革靴を自分にぶら  
下げさせて、嫁御寮のあとに犬のごとく従わせて、そのまま 今 日 こんにち の婿君の脚下に  
ひざまず 拝し 跪 かせらるる事である。よし 諾、その厳罰を 蒙 りましょう、断じて自分はこ

の革靴を開いて片袖は返さぬのである。ただ、天地神明に誓うのは、<sup>きじよ</sup>貴女の淑徳と貞潔である。自分は生れてより今に及んで、その姿を視たのはわずかに今より<sup>ぜん</sup>前、約三十分に過ぎない、……包ましくさしうつむかれた淑女は、申すまでもなく、自分に向って瞳をも動かされなかった事を保証する、——謹んで断罪を待ちます……各位。

<sup>とつとつ</sup>唸々として、しかも沈着に、<sup>るる</sup>純真に、縷々この意味の数千言を語ったのが、<sup>ごうごう</sup>轟々たる汽車の<sup>うち</sup>中に、<sup>しの</sup>あたかも雷鳴を凌ぐ、深刻なる独白のごとく私たちの耳に響いた。

<sup>あまた</sup>附添の数多の男女は、あるいは怒り、あるいは<sup>ののし</sup>罵り、あるいは呆れ、あるいはのろ<sup>ろうばい</sup>呪った。が、狼<sup>むかえ</sup>狽<sup>にんず</sup>したのは一様である。車外には御寮を<sup>むかえ</sup>迎<sup>にんず</sup>の人数が満ちて、汽車は高崎に留まろうとしたのであるから……

既に死灰のごとく席に復して<sup>めいもく</sup>瞑目した技師がその時再び立った。ここに手段があります、天が命ずるにあらず、地が教うるにあらず、人の知れるにあらず、ただ何もの<sup>ナイフ</sup>の考慮とも分らない手段である……すなわち小刀をもって革靴を切開く事なのです。

……<sup>わたくし</sup>私は拒みません。刀ものは持合せました、と云って、<sup>さや</sup>鞘をパチンと抜いて渡したのを、あせって震える手に取って、<sup>けんそう</sup>慳相な女親が革靴の口を切裂こうとして、<sup>きつ</sup>屹<sup>さいぎ</sup>と猜疑の瞳を技師に向くと同時に、大革靴を、革靴のまま提げて、そのまま下車しようとした時であった。

「いいえ！」

<sup>ひとこと</sup>と一言、その窈窕たる淑女は、袖つけをひしと取って、<sup>ひつき</sup>びりびりと引切った。緋<sup>ひ</sup>なが<sup>ながじゅばん</sup>襦袢が※[#「火+發」、192-6]と燃える、片身を火に焼いたように<sup>つっ</sup>衝と汽

車を出たその姿は、かえって露の滴のごとく、おめき <sup>つど</sup> 集う群集は <sup>くろけむり</sup> 黒煙に似たのである。

技師は <sup>まうつむ</sup> 真俯向けに、革鞆の紫の袖に伏した。

乗合は <sup>かつさい</sup> 喝采して、万歳の声が <sup>どっ</sup> 哄と起った。

汽車の進むがままに、私たちは窓から <sup>み</sup> 視た。人数に抱上げらるるようになって、やや乱れた黒髪に、雪なす小手を <sup>かざ</sup> 翳して此方を見送った半身の <sup>くれない</sup> 紅は、美しき血をもって描いた <sup>れんごく</sup> 煉獄の女精であった。  
碓氷の秋は寒かった。

## 八

藤助は語り継いだ。

<sup>ねえ</sup> 「姉さんが、そうすると……驚いたように、

(あれ、それを見ちゃ不可ません。)

(やあ、つい <sup>そそう</sup> 麁を。)

と、何事も御意のまま、頭をすくめて恐縮をしますとね、<sup>こごえ</sup> 低声になって気の毒そうに、

(でも、あの、そういう私が、<sup>そっ</sup> 密と出して、見たいんでございます。)

(そこで鍵が御入用。)

(ええ、ですけど、人様のものを、お許しも受けないで、内証で見ても悪うございませうねえ。)

(何、開けたらまた閉めておきゃあ、何でもありやしませんや。)

とその容<sup>ようす</sup>子<sup>す</sup>だもの、お前さん、何だって構<sup>かま</sup>やしません。——お手<sup>て</sup>軽<sup>かろ</sup>様に言<sup>い</sup>って退<sup>ひ</sup>け  
ると、口に袖<sup>そで</sup>をあてながら、うっかり釣<sup>つ</sup>込まれたような様子<sup>ようす</sup>でね、また前<sup>まへ</sup>後<sup>ご</sup>を視<sup>み</sup>まし  
たっけ。

(では、ちょっと今のうち鑄<sup>こ</sup>掛<sup>か</sup>屋<sup>や</sup>さん、あなたお職<sup>しやく</sup>柄<sup>がら</sup>で鍵<sup>かぎ</sup>を拵<sup>こしら</sup>え<sup>え</sup>るより前<sup>まへ</sup>に、手で  
開<sup>ひ</sup>けるわけには参<sup>ま</sup>りませ<sup>せ</sup>んの。)

ぶるぶるぶる……私<sup>わし</sup>あ、頭<sup>くちばし</sup>と嘴<sup>くちばし</sup>を一<sup>い</sup>所<sup>ところ</sup>に振<sup>ふ</sup>った。旦那<sup>めえ</sup>の前<sup>まへ</sup>だが、……指<sup>ゆび</sup>  
を曲<sup>ま</sup>げて、口<sup>くち</sup>を押<sup>お</sup>えて、瞼<sup>まぶた</sup>へ指<sup>ゆび</sup>の環<sup>たまご</sup>を当<sup>あ</sup>がって、もう一度<sup>いっぺん</sup>頭<sup>あたま</sup>を掉<sup>ふ</sup>った。それ、鍵<sup>かぎ</sup>の  
手<sup>て</sup>は、内証<sup>うちしるし</sup>で遣<sup>や</sup>っても、たちまちお目<sup>め</sup>玉<sup>たま</sup>。……不<sup>いけ</sup>可<sup>ね</sup>えてんだ、お前<sup>まへ</sup>さん。

ごはつと  
(御<sup>ご</sup>法<sup>はつ</sup>度<sup>と</sup>だ。)

と重<sup>おも</sup>く持<sup>も</sup>たせて、

(ではござれども、姉<sup>あね</sup>さんの事<sup>こと</sup>だ、遣<sup>や</sup>らかしやしよう、大<sup>お</sup>達<sup>た</sup>引<sup>ひ</sup>。奥<sup>おく</sup>様<sup>さま</sup>のお記<sup>き</sup>念<sup>ねん</sup>だ  
か、何<sup>なに</sup>だか知<sup>し</sup>らねえ。成<sup>なり</sup>程<sup>ほど</sup>こいつあ、そのな、へっへっ、誰<sup>どなた</sup>方<sup>かた</sup>かに向<sup>むか</sup>っての姉<sup>あね</sup>さんの  
心<sup>こころ</sup>意<sup>い</sup>気<sup>き</sup>では……お邪<sup>よこしま</sup>魔<sup>ま</sup>になるでございましょうよ。奥<sup>おく</sup>歯<sup>は</sup>にももの<sup>もの</sup>が挟<sup>は</sup>まったって譬<sup>たとえ</sup>  
はこれだ。すっぱり、打<sup>ぶ</sup>開<sup>ちま</sup>けてお出<sup>で</sup>しなせえまし。)

(いえ、あの、開<sup>ひ</sup>けて出<sup>で</sup>すよりか、私<sup>わたし</sup>が中<sup>ちゆう</sup>へ入<sup>い</sup>りたい。)

あどけにっこり  
と仇<sup>あどけ</sup>気<sup>にっこり</sup>なく莞<sup>わん</sup>爾<sup>にっこり</sup>すら、チエーしたもんだ。

ごじょうだん  
(御<sup>ご</sup>串<sup>くわ</sup>戯<sup>ぎ</sup>で、中<sup>ちゆう</sup>へ入<sup>い</sup>ると、恐<sup>おっ</sup>怖<sup>かね</sup>え、その亡<sup>な</sup>くな<sup>つ</sup>った奥<sup>おく</sup>さん<sup>さん</sup>の骨<sup>こつ</sup>があるんじゃ  
ありませ<sup>せ</sup>んかい。)

(もう、私は、あの、奥さまの、その<sup>ほね</sup>骨になりたいの。)

ああ、その骨になりたいか、いや、その骨でこっちは<sup>くらげ</sup>海月だ、ぐにやりとなった。

(御勝手だ。)

(あれ、そのかわりに奥さまが、活きた私におなんなさる、<sup>きりょう</sup>容色は、たとえこんなでも。)

(御勝手だ。いや、御法度だね。)

(そんな事を言わないで、後生ですから、鑄掛屋さん。)

(開けますよ。だがね……)

と、一つ<sup>もったい</sup>勿体で、

(こいつあ<sup>くでん</sup>口伝だ、見ちゃ不<sup>いけね</sup>可<sup>つぶ</sup>え、目を<sup>つぶ</sup>瞑<sup>つぶ</sup>っていておくんなさい。)

(はい。)

(もっと。)

(はい。)

<sup>いけね</sup>不<sup>いけね</sup>可<sup>いけね</sup>え不<sup>いけね</sup>可<sup>いけね</sup>え、薄目を開けてら。)

(まあ、では後を向きますわ。)

<sup>ひき</sup>引<sup>ひき</sup>しまつて、ふつくりと<sup>やわら</sup>柔<sup>やわら</sup>か<sup>やわら</sup>で、ああ、<sup>たま</sup>堪<sup>たま</sup>らねえ腰附だ。)

<sup>いや</sup>可<sup>いや</sup>厭<sup>いや</sup>……知りませんよ。)

と向直ると、<sup>じょうだん</sup>串<sup>じょうだん</sup>戯<sup>じょうだん</sup>の中にしんみりと、

(あれ、ちょっと待って下さいまし。いま目をふさいで考えますと、お<sup>ゆるし</sup>許<sup>ゆるし</sup>がないのに

錠前を開けるのは、どうも心が済みません。神様、仏様に、<sup>せいもん</sup>誓<sup>せいもん</sup>文<sup>せいもん</sup>して、悪い心でな

くっても、よくない事だと存じます。)

わっし <sup>まじめ</sup>  
私 も真面目にうなずきました。

(でも、合鍵は拵えて下さいまし、大事にそれを持っていて、……出来るだけ我慢はしますけれども、どうしても開けたくってならなくなりました時に、<sup>いのち</sup>生命にかえても、開けて見とうございますから。)——

<sup>とまり</sup> 晩の 泊 はどこだって聞きますから、向うの峰の日脚を<sup>あおむ</sup>仰 向いて、下の温泉だと云いますとね、双葉屋の女中だと、ここで姉さんが名を言って、お世話しましょうと、き<sup>はずみ</sup>つい発 奮さ。

御旅館などは勿体ねえ、こちとら式がと木賃がると、今頃はからあきで、<sup>ひとけ</sup>人氣がな<sup>おととい</sup>くって寂しいくらい。でも、お一方——昨日から、上州高崎の方だそうだけれど、東<sup>すくな</sup>京にも 少 かるう、品のいい美しい、お嬢さんだか、<sup>おくさま</sup>夫人だか、<sup>わか</sup>少 い方がお一方……」

「お一方？」

と、うっかり訊いて私は膝を堅うした。——小村さんも同じ思いは疑いない。——あの時、その窈窕たる御寮が、汽車を棄てたのは、かしこで、その高崎であった。

「さようで。——お一方<sup>ごとうりゅう</sup>御 逗 留、おさみしそうなその方にも、いまの立山が聞かせたいと、何となくそのお一方が、もっての外気になるようで、妙に眉のあたりを暗くしま

したっけ、<sup>じっ</sup>熟 と日のかげる山を<sup>なが</sup>視 めたが、

(ああ。鑄掛屋さん。)

<sup>あわただ</sup>と 慌 しい。……皆まで聞かずと飲込んだ、旦那様帰り引[#「引」は小文字]と

……ここらは鶺だてね、天幕の逢目をひよこりと出た。もとの山端へ引退  
り、さらば一服つかまつ仕ろう……つぎ置の茶の中には、松の落葉と朱葉が一枚。  
……」

(ああ、腹が減った……)

と色気のない声を出して、どかりと椅子に掛けたのは、焦茶色の洋服で、身のしま  
つた、骨格のいい、ちゅうぶる中古の軍人といった技師の先生だ。——言うまでもなく、立野  
竜三郎はかれ渠である——  
(減った、減った、無茶に減った。)

と、いきなりテエブル卓子の上の風呂敷包みを解くと、中が古風にも竹の子弁当。……  
御存じはございますまい、みつぐみわりごいれこかさな三組の食籠で、畳むと入子に重るやつでね。案  
ずるまでもありませんや、お道姉さんが心入れのお手料理か何かを、旅館から運ぶ  
んだね。

(うまい、ああ旨い、この竹輪は骨がなくて難有い。)

余り旨そうなので、こっちは里心が着きました。たてばや建場々々で飲酒りますから、滅多  
に持出した事のない仕込の片餉、かたげあぶらげにしめ油揚の煮染に沢庵というのを、もくもくと頬  
張りはじめた。

お道さんが手拭を畳んでちょっと帯に挟んだ、ちやくみおんな茶汲女という姿で、湯呑を片  
手に、半身で立ってわっしみ私の方を視ましたがね。

だんなさん  
(旦那様……あの、鑄掛屋さんが、お弁当を使いますので、お茶を御馳走いたしました。……お盆がなくて手で失礼でございます。)

と湯気の上る処を、卓子の上へ置くんでございますがね、加賀の赤絵の金々たるものなれども、ねえ、湯呑は嬉しい心意気だ。

(何、鑄掛屋。)

と、何だか、気を打ったように言って、先生、<sup>ひらた</sup>扁平い肩で捻じて、<sup>ね</sup>私<sup>わっし</sup>の方を<sup>のぞ</sup>覗きました、

(やあ、御馳走はありますか。)

とかすれ笑いをしなさんだ。

(へっ、へっ。)&#22642;先はお役人様でがさ、お世辞<sup>わらい</sup>笑をしたばかりで、こちらも肩で捻向く<sup>つら</sup>面だ、道<sup>どうろくじん</sup>陸神の首を<sup>つけか</sup>着換えたという形だてね。

(旨い。)

姉さんが嬉しそうな顔をしながら、

(あの、電信の故障は、直りましてございますか。)

(うむ、取払ったよ。)

と頬張った<sup>ふくみごえ</sup>含声で、

(思ったより余程さきだった。)

ははあ、電線に故障があつて、<sup>さわ</sup>障るもの<sup>はたざお</sup>の見当が着いた処から、先生、山めぐりで見廻ったんだ。道理こそ、いまし方天幕へ戻つて来た時に、段々塗の旗竿を、北極探検の浦島といった形で持っていて、かたりと立掛けて<sup>へえ</sup>入んなすつた。

(どうかなってましたの。)

(変なもの……何、くだらないものが、線の途中に <sup>ひっからま</sup>引 擲 って……)

<sup>はし</sup>カラリと 箸 を投げる音が響いた。

(うむ、来た。……トーン、トーン……<sup>よ</sup>可し。)

お道さんの声で、

(旦那様、何ぞ御心配な事ではございませんか。)

一口がぶりと茶を飲んで、

(<sup>つま</sup>詰 らぬ事を……<sup>よそ</sup>他所へ来た電報に、一々気を<sup>も</sup>揉んでいて<sup>たま</sup>堪 るもんですか。)

(でも、<sup>さっき</sup>先刻、この電信が参りました時、何ですか、お顔の色が……)

(……故障のためですよ、青天井の<sup>すすはき</sup>煤 払 は下さりませんからな、は、は。)

と笑った。

坂をするすると <sup>はいあが</sup>這 <sup>こうもり</sup>上 る、<sup>つッ</sup>蝙蝠 か、穴熊のようなのが、衝 と近く来ると、海軍

<sup>かぶ</sup>帽を 被 ったが、<sup>なり</sup>形 は郵便の配達夫——高等二年ぐらいな可愛い顔の少年が、ち

<sup>うやうや</sup>やんと 恭 しく礼をした。

(ああ、ちょうどいま <sup>つな</sup>繋 った。)

(どうした故障でございますか。)

と切口上で、さも心配をしたらしい。たのもしいじゃあございませんか。

(<sup>あみかけば</sup>網 掛 場の先の処だ、<sup>ま</sup>烏を蛇が捲いたなりで、電線に <sup>ひっからま</sup>引 擲 って死んでいた

んだよ。烏が <sup>ひきくわ</sup>引 啣 えて飛ぼうとしたんだらう……可なり <sup>おおき</sup>大 な重い蛇だから、飛

<sup>はりがね</sup>切れないで 鋼 線 に留った処を、電流で殺されたんだ。ぶら下った奴は、下から波

を打って鎌首をもたげたなりに、黒焦くろこげになっていた——君、急いでくれ給え、約四時間延着だ。)

(はっ。)

と云って行くのを、

(ああ、時さん。)

とお道さんは沈んで呼んだ。が、寂しい笑顔を向け直して、

(配達さん——どこへ……)と訊いた。

少年が正しく立たちとど停まっまって、畳んだ用紙を真みすぐに視て、

(狼温泉——双葉館方……村上縫子……)

(そしてどちらから。)

(ヤホ次郎——行って来ます。)

(そんな事を聞くもんじゃない。)

(ああ、済みませんでした。)

(何、構わないようなもんじゃあるがね——どっこいしょ。)

がた、がたと音がする。先生、もう一つの卓テエブル子とっくを引立って、猪と取組むようにいきおい勢よく持って出ると、お道さんはわけも知らないなりに、椅子を取って手伝いながら、

(どう遊ばすの。)

と云ううちに、一段下りた草くさっぱら原ばらへ据えたんでございますがね、——わけも知らずに手伝った、お道さんの心持を、あとで思うと涙が出ます。」

と肩もげっそりと、藤助は沈んで言った。……

「で、何でございますよ——どう遊ばすのかと、お道さんが言うと、心待、この日暮に

はここに客があるかも知れんと、先生が言いますわ。あれ、それじゃこんな野天でなく、  
と、言おうじゃあございませんか。

(いや、中で <sup>まちがい</sup> 間 違 があるとならんのので。)

(え、間違とおっしゃって。)

とお道さんが、ひったり寄った。

(私は、)

と先生は、<sup>ひじ</sup> 肘 で <sup>はた</sup> 口の <sup>よこなで</sup> 端 を 横 撫 して、

<sup>ひげ</sup> 髯 も <sup>いか</sup> ますずいが、言う事がまずくて不可んです。間違じゃあない、故障です、素人は  
気なしだからして、あんな狭い天幕の中で、器械にでも障って、また故障にでもなると  
不可んのだ。決して心配な事ではないのです、——さあ飯だ、飯だ。)

と今度はなぜか、箸を着けずに弁当をしまいかけて、……親方の手前もある、客に

電報が来た様子では、また <sup>おまえ</sup> 和 女 の 手 も 要 る だ ろ う、余り遅くならないうちにと、

<sup>ねんごろ</sup> 懇 げ に 言 う と、

(はい、はい。)

<sup>すなお</sup> と 柔 順 に 返 事 す る。片手間に、<sup>ねまき</sup> 継掛けの紺足袋と、寝衣に重ねる浴衣のような

洗濯ものを一包、弁当をぶら下げて、素足に <sup>わらぞうり</sup> 藁草履、ここらは、山家で——

<sup>しおしお</sup> 悄 々 と 天 幕 を 出 た 姿 に、もう山の影が薄暗く隈を取って映りました。

(今、何時だろう。)

と天幕口へ出て、先生が後姿を呼びましたね。

(……四時半頃にもなりましょうか。)

(時計が <sup>とま</sup> 止 ったよ——気をつけておいで。)

とおき  
と 大 な懐中時計と、旗竿の影を、すっきり立って、片 頬 夕日を浴びながら、熟  
なが  
と落ち着いて 視 めていなさる。……落ち着いて 視 ちゃあいなすつたが、先生少々どうか  
とおりま  
なさりやしねえのかと思ったのは、こう変に山が寂しくなって、通 魔 でもしそうな、  
しじま あんばい てんぐだおし こだま  
静寂の鐘の唄の 塩 梅 。どことなくドン——と響いて 天 狗 倒 の木精と一所  
うち  
に、天幕の 中 じゃあ、局の掛時計がコトリコトリと鳴りましたよ。

お地藏様が一体、もし、この梟ヶ嶽の頭を肩へ下り口に立ってござる。—— 私 ど  
いちなち うち かか なつか  
もは、どうかすると 一 日 の 中 にや人間の数より多くお目に 掛 る、至極 可 懐し  
いお方だが……後で分りました。この丘は、むかし、小さな山寺があつたあとだそうで、  
つた こみち やまぶところ  
そう言や草の中に、崩れた石の段々が 蔦 と一所に、真下の 径 へ、山 懐  
ゆのやど  
へまっています。その下の径というのが、温 泉 宿 入りの本街道だね。

お道さんが、帰りがけに、その地藏様を拝みました。石の袈裟の落葉を払って、白  
けさ  
い手を、じっと合せて、しばらくして、  
(また、お目にかかります。)

と顔を上げて、  
(後程に——)

もう先生は天幕へ入った——で、私 にしみじみとした調子で云った時の面影が  
まつげ  
忘れられねえ！…… 睫 毛 にたまって、涙が一杯。……風が冷く、山はこれから、湿  
っぼい。

つるべ はつふゆ  
秋の日は 釣 瓶 落した、お前さん、もうやがて 初 冬 とは言い条、別して山家だ。

しずか <sup>まんなか</sup> 静に大沼の真中へ石を投げたように、山際へ日暮の波が輪になって <sup>さっ</sup> 颯と広

がる中で、この藤助と云う奴が、何をしたと思 <sup>おぼしめ</sup> 召す。

三尺をしめ直す、脚絆の <sup>ほこり</sup> 埃 <sup>はた</sup> を払いたり、荷づなを <sup>てんびん</sup> 天秤に掛けたり、はずしたり。……三味線の糸をゆるめたり、袋に入れたり……さてまた袋を結んだり。

そこへ……いまお道さんが下りました、草にきれぎれの石段を、<sup>よ</sup> 攀じ攀じ、ずっとあが <sup>ひとり</sup> 上って来た、<sup>とし</sup> 一個、<sup>わか</sup> 年紀の <sup>だんな</sup> 少い紳士があります。

山の陰気な影をうけて、<sup>すご</sup> 凄 <sup>ひさしさが</sup> いような色の白いのが、黒の中折帽を <sup>ひさしさが</sup> 廂 <sup>下</sup> 下に、ステッキ <sup>洋</sup> 杖も持たず腕を組んだ、背広でオオバアコオトというのが、色がまた妙に白茶け

て、うそ寂しい。<sup>や</sup> 瘠せて肩の立った中脊でね。これが地藏様の前へ来て、すっくりと立

ったと思うと、<sup>かみ</sup> 頭髪 <sup>かみ</sup> の伸びた技師の先生が、ずかずかと天幕を出ました。

<sup>テーブル</sup> それ、卓 <sup>きつ</sup> 子 <sup>きつ</sup> を中に、控えて、開いて、屹 <sup>きつ</sup> と向合ったと思召せ。

<sup>わか</sup> 少 <sup>だんな</sup> い紳士 <sup>いんぎん</sup> が <sup>いんぎん</sup> 慇 <sup>いんぎん</sup> 懃 <sup>いんぎん</sup> に、

(失礼ですが、立野竜三郎氏でいらっしゃいますか。)

(さよう、お尋ねを <sup>こうむ</sup> 蒙 <sup>わたくし</sup> りました竜三郎、私 <sup>わたくし</sup> であります。)

(申しおくれました、私は村上八百次郎と申すものです。はじめてお目にかかります……唯今、名刺を。)

(いや。)

と先生、卓子の上へ両手を <sup>つ</sup> ずかと支いて、

(三年 <sup>ぜん</sup> 前 <sup>ぜん</sup> から、御尊名は、片時といえども相忘れません、出過ぎましたが、ほぼ、御

訪問[ #「訪問」は底本では「訪問」]に預りました<sup>ごようむき</sup>御用向も存じております。)

<sup>わか</sup>と、<sup>きつ</sup>少いのが少し<sup>きつ</sup>屹となって、

(用向を御存じですか?)

(まず、お掛け下さい。)

と先生は、ドカリと野天の椅子に掛けた。

何となく気色ばんだ双方の意気込が、殺気を帯びて<sup>あたり</sup>四辺を払った。この<sup>てい</sup>体を視

<sup>わっし</sup>た私だ。むかし物語によくあります、峰の堂、山の<sup>ほこら</sup>祠で、怪しく<sup>すご</sup>凄い神たちが、

神つどいにつどわせたという場所へ、破戒坊主が、はい<sup>つくば</sup>蹲ったという体で、<sup>おそろ</sup>可恐

し可恐し、地蔵様の前に<sup>しゃが</sup>踞んで、こう、伏拝む<sup>なり</sup>形をして、<sup>そっ</sup>密と視たんで。

先生は<sup>あらた</sup>更めて、両手を卓子につき直して、

「——受信人、……狼温泉二葉屋方、村上縫子、発信人は尊名、貴姓であります。

コンニチゴゴツク。ヨウイ(今日午後着く。用意)」

と聞きも済まらず、若い<sup>だんな</sup>紳士は、<sup>ななめ</sup>斜に衝と開いて、身構えて、

(何、私信を見た上、用件を御承知になりましたな。)

<sup>ひとえ</sup>「偏に申訳をいたします。電報を扱います節、<sup>もんじ</sup>文字は拾いますが、文字は普通  
……拾いますが、職務の徳義として、文字は綴りましても、用件は記憶しません。しか  
るところ、唯今申上げました(コンニチゴゴツク、ヨウイ)で、不意に故障が起りました、  
幾度も接続を試みますうちに、うかと記憶に残ったのです。のち四時間、やっと電線

<sup>かいふく</sup>が<sup>かいふく</sup>恢復して(ヨキカ)と受信しましたのです。謹んで謝罪いたします。」

<sup>おもて</sup>と<sup>おもて</sup>面を上げ、<sup>から</sup>乾<sup>せき</sup>びた咳して、

「すなわち、受信人、狼温泉、二葉屋方、村上縫子。発信人、尊名、貴姓、すなわち、  
(今日午後着く。用意よきか。)」

(分りました。)

しずか  
と 静 に言う時、ふと見返った目が、わっし  
私 に向いた、と一所にな……先生の

まなこ  
眼 も光りました。

おび  
怯 えて立ったね、ぞっと  
ぞっと 悚然した。

荷を担いで、ひょうろ、ひよろ。

ようやく石段の中ほどで、ほっ  
吻 と息をして立った処が、うすくれあい  
薄 暮 合 の山の すご  
さ。

……天秤かついだ うぬ なり  
己 が 形 が、何でございますかね、天狗様の下男が清水を汲み

に山一つ あなた  
彼 方 へといった てい  
体 で、我ながら、余り世間離れがした心細さに、

(ほっ、)

と云ったが、声も、ふやける。肩をかえて性根だめしに、そこで一つ……

(鑄掛——錠前の直し。)

何と——旦那。」

## 九

「……時に——雪の たいまつ  
松 明 が二把。わ あとさき  
前後 に次第に高くなって、白い ふくろ  
梟、化梟、

つたかずら  
蔦 葛 が鳥の毛に見えます、その石段をよ  
攀 じるのは、まるで まぼろし  
幻影 の女体が捧

げて、頂の松、電信柱へ、あが  
竜燈が 上 るんでございました。

上り果てた時分には、もう降っているのがや  
止 みましたっけ。根雪に残るのじゃあござ

いません、ほんの前触れで、一きよめ白くしましたので、ぼっとほの白く、薄鼠に、梟  
の頂が<sup>やみ</sup>暗夜に浮いて見えました。

苦しい時ばかりじゃあねえ。こんな時も神頼み、で、<sup>わっし</sup>私 は <sup>がけぶち</sup>崖 縁 をひよいと横  
へ切れて、のしこと地蔵様の背後に <sup>うしろ</sup>蹲 <sup>しゃが</sup>み込んで <sup>のぞ</sup>覗 いたんで。石像のお袈裟の  
前へは、<sup>まっしろ</sup>真 白 に吹掛けましたが、<sup>うしろ</sup>うしろは <sup>こけ</sup>苔 のお法衣のまま <sup>まっくろ</sup>真 黒 で、お顔が  
青うございましたよ。

大方いまの雪のために、先生も、客人も、天幕に <sup>ひきこも</sup>引 籠 ったんでございましょう。  
テエブル  
卓 子 ばかりで影もない。野天のその卓子が、雪で、それ大理石。——立派やかな  
お座敷にも似合わねえ、安火鉢の <sup>ゆが</sup>曲 んだやつが転がるように出ていました。

その火鉢へ、二人が <sup>たいまつ</sup>炬 火 をさし込みましたわ。一ふさり <sup>ふさ</sup>臥 っ っ て、柱のように根  
を持って、<sup>かつ</sup>赫 と燃えます。その <sup>あかり</sup>灯 で、早や <sup>でばな</sup>出 端 に立って出かかった先生方、左  
右の形は、天幕がそのままの <sup>がんせき</sup>巖 石 で、言わねえ事じゃあねえ、青くまた朱に刻み  
つけた、怪しい <sup>さんじん</sup>山 神 に、そっくりだね。

ツツとあとへ引いて、若い <sup>だんな</sup>紳 士 が、卓子に、さきの席を取って、高島田の天人を、  
(縫子さん。)  
と呼びました。

御婦人が、髪 <sup>ふきながし</sup>の 吹 流 を取った、気高い顔は、松明の火に <sup>いきいき</sup>活 々 と、その手  
拭で、お召のコオトの雪を払っていなすったけ、揺れて <sup>さざんか</sup>山 茶 花 が散るようだ。  
(立野さんに御挨拶をなさい。)

(唯今。)

しづか  
と 静 に言つて、例の せなか  
背 後に掛けた竹の子笠を、紐を解いて、取りましたが、吹  
添つて、風はあるのに、気で鎮めたかして、その笠が動きもしません。

卓子の脚に、お道さんのと重ねて置いて、

あなた  
(貴方——御機嫌よう。)

(は。)

と先生は一言云つたきり、顔も上げないで、めり込むように深く卓子の端についた太  
い腕が震えたが、それより深いのは、若旦那の方のとし  
年齢とも言わない額に刻んだ幾  
しわ  
筋かの 皺 で、短く一分刈かに見える つぶり  
頭 は、坊さんのようで、福々しく耳の おった  
押 立  
おおき  
つて 大 いのに、引締つた口が窪んで、大きく見えるまで、げっそりと頬の肉が落ち  
ている。

おくさん  
(夫人。)

と先生はうつむいたままで、

(再び、御機嫌のお顔を拝することを得まして、わたくし  
私 一代の本懐です。生れつきの  
まのあたり  
口不調法が、かく 眼 前に、貴方のお姿に対しましては、何も申上げる ことば  
言 を覚  
えません、ただしかし、唯今。)

と、よろめいて立って、椅子の手に すが  
縋 りました。

ひとつこと  
(唯今、一 言 御挨拶を申し上げます。)

と天幕に入ると、提げて出た、卓子を ひっかか  
引 抱 えたようなものではない、千斤の重  
じん  
さに堪えない てい  
体 に、大革鞆を持った胸が、といき  
吐呼吸を浪に吐く。

それと見ると、<sup>みの</sup> 簑 を絞って棄てました、お道さんが手を添えながら、顔を見ながら、  
から <sup>もつ</sup> 搦 んで、纏 れて、うっかりしたように手伝う姿は、かえって、あの、紫の片袖に魂が  
入って、革鞆を抜けたように見えました。

ずしりと、卓子の上に置くと、……先生は一足 <sup>さが</sup> 退 っ て、起立の <sup>なり</sup> 形 で、  
(もはや、お二方に対しましては、……御夫婦に向いましては、立って身を支えるにも  
堪えませんが、一刻も早くこの <sup>にんちく おこない</sup> 人 畜 の 行 為 に対する、御制裁を待ちます。即時に  
御処分のほどを願います。)

若旦那が、

(よろしいか。)

とちと甘いほどな、この場合優しい声で、御夫人に言いました。

(はい。)

と、若奥様は潔い。

若旦那はまっすぐに立直って、

(立野さん。)

(……………)

(では、御要求をいたします。)

(謹んで承ります、一点といえども相背きはいたしますまい。)

(そこに、卓子の上に横にお置きなさいました、革鞆を、縦にまっすぐにお直し下さ  
い。)

(承知いたしました——いやいや罪人の手伝をしては、お道さん、<sup>けが</sup> 汚 れるぞ。)

と手伝を払って、しっかりとその処へ据直す。

(立野さん。<sup>あなた</sup> 貴 下 は革鞆の全形と <sup>おりかさな</sup> 折 重 っ て、その容量を外れない範囲内にお

立ち下さい。縫子が私の妻として、婚礼の日の途中、汽車の中で。）

と云う声が少し震えました。

（貴下に、その紫の袖を許しました、その <sup>せめ</sup>責に任ずるために、ここに <sup>ピストル</sup>短銃を所持しております、——その短銃をもってここに居て革靴を打ちます。弾丸をもって錠前を <sup>いき</sup>射切るのは、錠前を <sup>うちき</sup>射切って、その片袖を——同棲三年間——まだ純真なる処女の身にして、私のために取返すんです。袖が返るとともに、<sup>あらた</sup>更めて結婚します。夫婦になります。が、勿論しかし、それが夫婦のもの、身の終結になるかも分りません。なぜと云うに、革靴と同時に、兇器をもって貴下のお <sup>からだ</sup>身体に向うのです。万一おいのち <sup>いのち</sup>生命を縮めるとなれば、私はその罪を負わねばならないのですから。それは勿論覚悟の前です……お察し下さい、これはほとんど私が生命を忘れ、世間を忘れ、甚しき <sup>にん</sup>一人の親をも忘れるまで、寝食を廃しまして、熟慮反省を重ねた上の決意なのです。はじめは貴方が、当時汽車の窓から赤城山の絶頂に向って御投棄てになったという、革靴の <sup>なん</sup>鍵を、何とぞして、拾い戻して、その鍵を持ちながらお目にかかって、貴下の手から錠を解いて、縫のその袖を返して頂きたいと存じ、およそ半年、百日に <sup>わた</sup>互りまして、狂と言われ、痴と言われ、愚と言われ、<sup>しつと</sup>嫉妬と言われ、じんすけと <sup>あざ</sup>嘲けられつつも、<sup>たぜい</sup>多勢の人数を <sup>かりあつ</sup>狩集めて、あの辺の汽車の沿道一帯を、<sup>あわ</sup>粟、<sup>そば</sup>蕎麦、<sup>あきた</sup>稲を買求めて、草に刈り、<sup>あば</sup>芥にむしり、甚しきは古塚の横穴を <sup>あば</sup>発いてまで、捜させました。流星のごとく天際に消えたのでしよう、一点似た釘も見当りません。——唯今……要求しますのは、その <sup>のち</sup>後の決心である事を <sup>りょう</sup>諒として下さいまし。縫もよくこの意を体して、三年の間、昼夜を分かず、的を射る修練をいたしました。——

最初、的をつくります時、縫がものさしを取って、革靴の寸法を的に切りましたが、こ  
で実物を拝見しますと、その <sup>おおき</sup>大 さと言ひ、錠前のある位置と言ひ、ほとんど寸分の  
違いありません。……不思議です。……特に奇蹟と存じますのは、——家の地続き  
を <sup>しき</sup>劃 いて、的場を建てましたのですが、土地の様子、景色、一本の松の形、地蔵の  
あるまで。)

—— <sup>わっし</sup>私 はすくんだね——

(夢のようによく似ています。……多分、皆お互に、こうした運命だと存じます。……

<sup>ピストル</sup>短 銃 は特に外国に注文して、英国製の最優良なのを取寄せました。連発ですが、  
弾丸はただ一つしか <sup>こ</sup>籠 めてありません、きっと仕損じますまい。しかし、御覚悟を下さ  
いまし。——もつとも革靴と <sup>かさな</sup>重 ってお立ち下さいますのに、その間隔は、<sup>けん</sup>五 間、  
十間、あるいは百間、三百間、<sup>あなた</sup>貴 下の、お心に任せます。要はただ、着弾距離をお  
離れになりません事です。)

(一步もここを動きません。)

先生は、<sup>こまぬ</sup>拱 いた腕を解いて言いましたぜ。」

——そうだろうと、私たちも思ったのである。

十

<sup>たま</sup>「堪 らねえやね。お前さん。」

<sup>わっし</sup>私 <sup>えてんぼ</sup>あ 猿 坊 のように、<sup>うね</sup>ちよろりと影を <sup>はいだ</sup>畝 けて這 出して、そこに震えて立って

いる、お道姉さんの手に合鍵を<sup>おッ</sup>押つけた。早く早く、と口じゃあ言わねえが、袖を突いた。

——若奥様の手が、もう<sup>ふところ</sup>懐中に入った時でございますよ。

(御免遊ばせ。)

<sup>すが</sup>と縫りつくように、伸上って、お道さんが鍵を合せ合せするのが、あせるから、ツルツルと<sup>すべ</sup>二三次<sup>へ</sup>りました。

(ああ、ちょっと。)

と若奥様が、手で<sup>おさ</sup>圧えて、

(どうぞ……そればかりは。)

<sup>すず</sup>と清しく言います。この手二つが触ったものを、錠前の奴、がんとして、雪になっても消えなんだ。

<sup>こわ</sup>舌の硬ばったような先生が、

(飛んでもない事——お道さん。)

(いいえ、構いません。)

と若旦那はきっぱりと、

(飛んでもない事ではありません。それが当然なのです。立野さん。<sup>あなた</sup>貴下が御自分

でなくっても、貴下が許して、錠前をさえお開き下さるなら——方法は<sup>えら</sup>択びません。

<sup>ピストル</sup>短銃なんぞ何になりましょう、私はそれで満足します。)

(旦那様。)

と精一杯で、お道さんが、押留められた一つの手を、それなり先生の袖に縫って、無

おもい  
量の 思 の目を凝らした。

(はあ、)

と落ち込むような大息して、先生の胸が崩れようとするとな。

(貴方、……あの鍵が返りましたか。……優しい、お道さん、美しい、<sup>ねえ</sup>姉さん、……お優しい、お美しい姉さんに、貴方はもうお心が移りましたか。)

と云って、若奥様が<sup>じつ み</sup>熟と視ました。

先生が蒼くなって、両手でお道さんを<sup>おしの</sup>押除けながら、

(これは<sup>よそ</sup>余所の娘です、あわれな<sup>みなしご</sup>孤児です。)

とあとが消えた。

(決行なさい、縫子。)

(……………)

(打て、お打ちなさい。)

(唯今。)

と肩を軽く斜めに落すと、コオトが、すっと脱げたんです。<sup>あお</sup>煽りもせぬのに気が立つ

て、<sup>さつ</sup>颯と火の上る<sup>たいまつ</sup>松明より、<sup>くれない</sup>紅に燃立つばかり、<sup>ひ もんちりめん</sup>緋の紋縮緬の

<sup>ながじゅばん</sup>長襦袢が半身に流れました。……袖を切ったと言う三年前の婚礼の日の

<sup>はれいしょう</sup>曠衣裳を、そのまま、一方紫の袖の紋の揚羽の蝶は、革靴に留まった友を慕って、火先にひらひらと揺れました。

若奥様が片膝ついて、その燃ゆる火の袖に、キラリと光る<sup>ピストル</sup>短銃を構えると、先生

は、両方の膝に手を垂れて、目を<sup>つむ</sup>瞑って立ちました。

(お身代りに私が。)

とお道さんが、その前に<sup>たちふさ</sup>立塞がった。

「あ、危い、あなた。」

と若旦那が声を絞った。

若奥様は折敷いたままで、

<sup>いけ</sup>  
(不可ません——お道さん。)

(いいえ、本望でございます。)

<sup>き</sup>  
(私が肯きません。)

と若奥様が<sup>かぶり</sup>頭<sup>ふ</sup>を掉ります。

(貴方が、お肯き遊ばさねば、旦那様にお願い申し上げます。こんな山家の女でも、心

にかわりはござんせん、<sup>ねがい</sup>願<sup>かな</sup>を叶えて下さいまし。お<sup>なさけ</sup>情はうけませんでも、色も恋も存じております。もみじを御覧なさいまし、つれない霜にも血を染めます。私は

<sup>い</sup>  
ただ生きておりますより、旦那さんのかわりに死にたいのです。その方が嬉しいので

す。こんな事があろうと思って、もう家を出ます時、なくなった母親の<sup>かたみ</sup>記念の裾模様

を着て参りました。……手織木綿に<sup>まえだれ</sup>前垂した、それならば身分相応ですから、人

様の前に出られます。時おくれの古い<sup>もんつき</sup>紋着、襦袢も帯もうつりません、あられもな

いなりをして、恋の<sup>かたき</sup>仇の奥様と、並んでここへ参りました。ふびんと思って下さいまし。

し。ああ女は浅間しい、私にはただ一枚、母親の<sup>かたみ</sup>記念だけれど、奥様のお姿と、こんなはかないなりをくらべて、思う方の前に出るのは死ぬよりも辛うござんす。それさ

え思い切りました。男のために死ぬのです。<sup>みょうが</sup>冥加に余って勿体ない。……ただ心

がかりなは、私と同じ<sup>みなしご</sup>孤児の、時ちゃん—少年の配達夫—の事ですが、あの<sup>こ</sup>児も先生おもいですから、こうと聞いたら喜びましょう。)

若旦那の目にも、奥様にも、輝く涙が見えました。

先生は胸に大波を打たせながら、半ば<sup>じょうだん</sup>串戯にするように、手を取って、  
<sup>なきわらい</sup>泣笑をして、

(これ、馬鹿な、馬鹿な、ふふふ、馬鹿を事を。)

(ええ、馬鹿な女でなくっては、こんなに旦那様の事を思いはしません。私は、馬鹿が嬉しゅうございます。)

(弱った。これ、<sup>つま</sup>詰らん、そんな。)

(お手間が取れます。)

(さあ、お退き、これ、<sup>ど</sup>そっちへ。)

(いいえ、いいえ。)

いやいや <sup>かぶり</sup> 否々をして、<sup>の</sup>頭をふって甘える肩を、先生が抱いて退けようとするなり、くるりとうしろ向きになって、前髪をひしと胸に当てました。

<sup>いきしず</sup>呼吸を鎮めて、<sup>いだ</sup>抱いた腕を、ぐいと背中へ<sup>ま</sup>捲きましたが、

(お退きと云うに。——やあ、お道さんの<sup>おん</sup>御母君、<sup>ご</sup>御母堂、お<sup>かたみ</sup>記念の肉身と、衣類に対して失礼します、御許し下さい……御免。)

と云うと、抱倒して、

(ああれ。)

と震えてもがくのを、しかと片足に<sup>ふみす</sup>踏据えて、<sup>におうだち</sup>仁王立にすっと立った。

(用意は<sup>よろ</sup>宜しい。……縫子さん。)

(……………)

(……………)

(さようなら……)

(……さようなら、貴方。)

おたまや  
日光の御廟の天井に、墨絵の竜があつて鳴きます、尾の方へ離れると音はしね

あご  
え、頤の下の低い処で手を叩くと、コリンと、高い天井で鳴りますので、案内者は、勝手に泣竜と云うのでございますが、同じ音で。――

からだ  
コリンと響いたと思うと、先生の身体は左右へふらふらして動いたが、不思議な事には倒れません。

なむさんぼう  
南無三宝。

えもん あおむ  
片手づきに、白襟の衣紋を外らして仰向きになんなすった、若奥様の水晶のよう

のど もつとい  
な咽喉へ、口からたらたらと血が流れて、元結が、ぷつりと切れた。

トタンにな、革靴の袖が、するすると抜けて落ちました。

ピストル よ  
(貴方……短銃を離しても、もう可うございますか。)

ひざまず  
若旦那が跪いてその手を吸うと、釣鐘を落したように、軽そうな手を柔かに、先生の膝に投げて、

(ああ、嬉しい。……立野さん、お道さん、短銃をそちらへ向けて打つような女とお思いなさいましたか。)

ただいま たちどころ  
(只今、立処に自殺します。)

ふ くしこうがい  
と先生の、手をついて言うのをきいて、かぶりを掉って、櫛笄も、落ちないで、

乱れかかる髪をそのまま莞爾<sup>にっこり</sup>して、

(いいえ、百万年の<sup>のち</sup>後に……また、お目にかかります。お二方に、これだけに思わ  
れて、縫は世界中のしあわせです——貴方、お詫<sup>わび</sup>は、あの世から……)  
最後の言葉でございました。」

「お道さんが<sup>いちようがえし</sup>銀杏返の針を抜いて、あの、片袖を、死骸の袖に縫つけました。

その間、膝にのせて、胸に抱いて、若旦那が、お縫さんの、柔かに投げた<sup>かいな</sup>腕を  
撫で、撫で、

(この、清い、雪のような手を見て下さい。私の偏執と自我と自尊と嫉妬のために、

せん<sup>はげ</sup>詮ずるに<sup>よ</sup>烈しい恋のために、——三年の間、夜に、日に、短銃<sup>ピストル</sup>を持たせられ  
た、血を絞り、肉を刻み、骨を砂利にするような<sup>ごうりやく</sup>拷掠に、よくもこの手が、鉄にも鉛  
にもなりませんでした。ああ、全く魔のごとき残虐にも、美しいものは滅びません。私

<sup>ざんき</sup>は慚愧します。しかし、<sup>あなた</sup>貴下と縫子とで、どんなにもお話合のつきますように、私に  
三日先立って、縫子をこちらによこしました、それに、あからさまに名を云って、わざと

電報を打ちました。……<sup>あなた</sup>貴下を当電信局員と存じましていたした事です。とにかく私  
の心も、身の<sup>はて</sup>果も、やがて、お分りになりましょう。)

と、いいいい、地藏様の前へ、男が二人で<sup>そっ かつ</sup>密と昇ぐと、お道さんが、笠を伏せて、  
その上に帯を解いて、畳んで枕にさせました。

<sup>わっし</sup>私<sup>私</sup>も十本の指を、額に堅く組んで頂いて拝んだ。

そこらの木の葉を、やたらに火鉢にくべながら……

(失礼、支度をいたしますから。)

若旦那がするすると松の樹の処へ<sup>ゆ</sup>行きます。

そこで内証で涙を払うのかと偲うと、肩に<sup>ひとゆす</sup>一揺り、ゆすぶりをくれるや否や、

きつたて<sup>つるぎ</sup>切立の崖の下は、<sup>いわ</sup>剣を植えた<sup>まっさかさま</sup>巖の底へ、真逆様。霧の海へ、薄ぐろく、影が残って消えません。

——旦那方。

先生を御覧なせえ、いきなりうしろからお道さんの口へ<sup>さるぐつわ</sup>猿轡<sup>は</sup>を嵌めましたぜ。

——一人は放さぬ、一所に死のうと<sup>もだ</sup>悶えたからで。——それをね、<sup>テント</sup>天幕の中へ抱

入れて、電信事務の<sup>テエブル</sup>卓子に向けて、椅子にのせて、手は<sup>ゆわ</sup>結えずに、腰も胸も兵児帯でぐるぐる巻だ。

(時夫の来るまで……)

そう言って、石段へ<sup>ゆ</sup>ずつと行く。

わっし<sup>おりくち</sup> おりくち<sup>おっか</sup> おっか<sup>い</sup> 私<sup>い</sup> は下口まで追掛けたが、どうして可いか、途方にくれてくるくる廻った。

お道さんが、さんばら髪に肩を振って、身悶えすると、消えかかった松明が<sup>かッ</sup>赫と燃えて、あれあれ、女の身の丈に、めらめらと空へ立った。

<sup>からだ</sup>先生の身体が、影のように帰って来て、いましめを解くと一所に、五体も溶けたよ

うなお道さんを、<sup>しか</sup>確と腕に抱きました。

いや何とも……酔った勢いで話しましたが、その人たちの事を思うと、何とも言いようがねえ。

実は、<sup>わっし</sup>私と云うものは……若奥様には内証だが、その高崎の旦那に、頼まれま

して、技師の方が<sup>い</sup>可い、とさえと一<sup>ひとこと</sup>言云えば、すぐに合鍵を<sup>こしら</sup>拵えるように、道中お抱えだったのだ。……何、鍵までもありやしません。——天幕でお道さんが相談をしました時、寸法を見るふりをして、錠は、はずしておいたんでございますのに——  
皆、何とも言いようがねえ、見てござった地藏様にも手のつけようがなかったに違えねえ。若旦那のお心持も察して上げておくんせえ。

あくる日<sup>そばみち</sup> 峠道<sup>みずどよ</sup>を伝いますと、山から取った水<sup>みずぐるま</sup> 樋が、空を走って、水車  
に<sup>さっ</sup>颯と<sup>かか</sup>掛ります、<sup>まっか</sup>真紅な木の葉が宙を飛んで流れましたっけ、誰の血なんでございましょう。」

<sup>ふもと</sup>  
(峰の白雪 麓の氷

今は互に隔てていれど)

あとで、鑄掛屋に立山を聴いた——追善の心である。皆涙を流した……座は通夜  
のようであった。

姨捨山の月霜にして、<sup>はてし</sup>果なき谷の、<sup>もや</sup>暗き霧の底に、千曲川は水晶の珠数の乱  
るごとく流れたのである。

大正九(一九二〇)年十二月

底本：「泉鏡花集成 6」ちくま文庫、筑摩書房  
1996（平成 8）年 3 月 21 日第 1 刷発行  
底本の親本：「鏡花全集 第二十卷」岩波書店  
1941（昭和 16）年 5 月 20 日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、「安<sup>あだち</sup>達

ヶ原」「<sup>ふくろ</sup>鼻ヶ<sup>たけ</sup>嶽」は小振りに、「焼ヶ<sup>やけ</sup>嶽」は大振りにつくっています。

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007 年 2 月 11 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/)  
で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで  
す。